【翻　訳】

ラザースフェルドと一緒に仕事をして

ロバート・マートン　著
久　慈　利　武　訳

二十数年前，ポール・ラザースフェルドは彼が私に編集を求めなかった3分の1世紀前に書いた若干の論文のひとつを完結しつつあった。実は，私はその論文を彼が書いているのを知らなかった。非常にグッドな理由から，それはルイス・コーザーによってまとめられつつあった私の仕事に捧げられた祝賀のための論文集に載せられることになった。「マートンと一緒に仕事をして」と題したので，その論文は実は本稿のタイトルを決めることになった[1]。しかしながら，私は数十年の彼との交友とコラボレーションを思い返すので，彼を「ラザースフェルド」と呼称するのは私の中に見いださない。その代わりにうち解けた間柄に浸り，明らかにヨーロッパ・スタイルでない「ポール」と呼称することにする。

テキスト解明という由緒あるフランスの伝統へのポールの生涯の関心は，彼に私の公開されたテキストの解析に焦点を置かせた。その代わり私は，我々の思考スタイル，社会的・認知的ネットワーク，対人的緊張と解消，学生との交流パタンにおける目につく差異，潜在的類似性のような事柄に関わる35年に及ぶコラボレーションの二人だけが知るテキスト，コンテキスト，サブテキストにこだわるつもりである。ようするに，ラザースフェルドの公開された作品は注釈と分析の豊富なライブラリーの主題であるが[2]，ポール自身の論文を別とすれば，我々のコラボレーションの性質に注目した印刷物はほとんどない[3]。ポールが私の仕事を，彼のライフワークを支配した方法論的視点から追求したように，私は我々のコラボレーションを，私自身のライフワークを支配した科学社会学の視点から追求するつもりである。科学とスカラーシップにおけるコラボレーションの社会・文化的なものと心理的なものの入

---

[1] 我々のコラボレーションについてのこの補完的考察はラザースフェルドの分析的で身近でドキュメントされた考察（Lazarsfeld 1975：35-66.）と合わせて読むなら，拡張された意味を持つであろう。ポールがその考察を書いていたとき，コロンビア大学時代の彼の弟子（コールマンとピーター・ロッシ）と私が彼自身の学者生活を祝賀する論文集を編んでいたことを彼は知らなかった。私はその論文集に「ラザースフェルドと一緒に仕事をして」という対の一片（the companion piece）を執筆しようと思ったが，健康状態が思わしくなかったため短い追悼文「ポール・ラザースフェルドの思い出」（Merton 1979：19-22.）で甘んじなければならなかった。

[2] 最も最近の洞察に富んだそれは，社会学の遺産シリーズのラザースフェルトを編集したブードンの編者序論である（Boudon 1993：1-29.）。

[3] しかし我々は周知のように，沢山の弟子達がコロンビア大学社会学のミクロな環境を考察する際に二人のコラボレーションについて鋭い観察を出版していることを知っている。

り組んだ力学についてはほとんど知られていないので，私はこの営みのタイトルを文字通りに受け取るつもりである。これまで公にされてこなかった記録ならびに公開された記録の双方を引き合いに出しながら，我々のコラボレーションのブラック・ボックスを開け，光で照らし解読に努めるつもりである。その際私がパンドラの箱を開けないことを祈っている。

1.　あり得ないコラボレーション An improbable collaboration

1.1　正反対の者達の任命　An appointment of contraries

ポールと私のコラボレーションは，設計された事柄であるよりもむしろ 1930 年代後半と 1940 年代前半に登場したコロンビア大学社会学の深い亀裂の全く予想されなかった，引き延ばされた帰結であった。当時のシニア教授ロバート・マッキーバー（政治理論家兼社会学理論家）とロバート・リンド（有名なミドルタウン研究の共著者）は数年にわたり知的にも人格的にもそりが合わないできた。結果として彼らは新しいシニアの任命で合意することができず，学科を事実上の休止に追い込んできた。事態は余りに深刻だったので，長期に大学学長の座にあり創意に富んだニコラス・ムレイ・バトラー（組織内ではニコラス・ミラキュラス（＝奇跡を起こす人物）として知られていた）が最終的に介入を決断した。聡明にも彼は争う当事者の各々に新たな lesser apointment が与えられるべきと命じた。リンドは，数年前に大半が失業したオーストリアの村落の先駆的研究『マリエンタール』を指図した経験的研究者ポールを選んだ。マッキーバーは社会理論家として私を選んだ。ポールと私は，当時のこの論争的コンテキストについて，つまり我々が敵対的役割で，そして補完的よりも釣り合いのために学科に招かれたことについては思いも寄らなかった。我々はのちになって事の次第のすべてを知った。もちろんそれはしばらくして私が関心を寄せる社会的パタン「意図的社会行為の予期せざる結果」のもう一つの事例として，裁定者バトラーの命令の帰結を私に引き合いに出させることになった。バトラーは学科の知れ渡った停止を終わらせることにだけ関心があったから，そしてマッキーバーとリンドは各々が知的に親しみを覚える同僚を獲得することにだけ関心があったから，それはそれぞれにとって予期せざる結果であった。

ポールも私もこれまで出会ったことがなかった。我々が同僚になることを聞かされるまでお互いについて耳にしたことすらなかった。これは少しも奇妙なことではない。ようするに，我々は全くかけ離れた分野で仕事をしてきており，同じ雑誌に掲載したことすらなかった[4]。

[4] ポールは心理学系雑誌とマーケテング系雑誌，世論系雑誌に掲載し，私は社会学系，科学史系雑誌に掲載してきた。1941 年以降になってようやく，ポールは社会学系，科学史系雑誌に掲載し，私は世論系雑誌に掲載するようになった。

1924 年から 1940 年までで，ポールの 60 数本の出版物は社会調査の方法論と手続き，失業，マス・コミ，市場リサーチ，のちに行為の経験的研究と呼称されるものに充てられていた。1934 年から 1940 年までで，私の 20 数本の出版物は予期せざる結果，社会的時間，逸脱行動，官僚制構造のような社会理論とのちに科学社会学と呼称されるものに充てられていた。上記の一致しない主題，問題領域から予想されるように，我々はまた全く異なった社会，心理学的思考の系譜を継いでいる。かくして我々のコロンビア大学就任以前の出版物で引用された 520 数人の著者の中で両者によって引用されたのは 7 人の著者と 2 組の共著者だけであった（1.3%）[5]。我々のコロンビア大学就任以前の出版物で引用された頻度の高い上位 10 人は一人も重ならない[6]。Ludwick Fleck（生物学から科学社会学に転じたポーランドの学者）は，我々が全く異なった「思考集団」から出自し，明らかに全く異なった「思考スタイル」を使用していると結論を下した（Fleck 1979［1935］）[7]。事後的よりも事前的に考察すると，二人の明らかに異なったマインドが持続的なコラボレーションに入ることになると想定する理由は明らかに乏しかった。以前に我々が出会うことがなかったことは，我々のいずれにもコラボレーションに入る理由を与えなかったと言える。

1.2　距離を置いた最初の出会い

ニューオリンズ市のチューレーン大学（1 年ほど前にハーヴァードからそこに移っていた）からニューヨーク市のコロンビア大学に移籍の招聘を受諾して，ポール・ラザースフェルドも同時にコロンビア大学に任命されたことを知った。アーカイブ記録から判断して，私はこれまで未知の同僚の著述を探し始めたことは確かであった[8]。私がこつこつと掲載しつつある一連のものを彼が読んでいないものと確信して，かなり最近の論文の若干の抜き刷りを彼に送り，当時彼が掲載した唯一の社会学雑誌『社会研究年誌』に見つけた論文のコピーときわめて馴染みのない雑誌（応用心理学）に載った事例研究に関係したもう一編のコピーを依頼した。私はその研究ノートのコピーを一切持っていなかった。カーボンコピーはなくさない

---

[5] Garner, Lois B. Murphy, Theodore Newcomb の社会心理学者，Robert S. & Helen M. Lynd, Ray F. Bletto の社会学者，John R. Hicks の経済学者，Harold D. Laswell の政治学者，L.L. Thurstone の統計心理学者。

[6] PFL にとっては，上位 10 人は，Hans Zeisel, E.A. Rundquist, Ray Sletto, Marie Jahoda, E.W. Bakke, Hadley Cantril, M. Elderton, Samuel A. Stoufer, O.M. Hall, B. Zawadski。RKM にとっては，Emile Durkheim, Max Weber, Karl Manheim, P.A. Sorokin, Adam Anderson, Vilfrdo Pareto, Marcel Mauss, L.L. Thurstone, William F. Ogburn であった。我々が同僚になってから 10 年ごとにそれぞれのリファレンスが収斂しているかどうかの検討は行わなかった。

[7]「思考集団（Denkkollektiven）」「思考スタイル（Denkstil）」はカール・マンハイムによって導入された概念だが，フレックによって独自に有効活用されている。
Ludwick Fleck 1979［1935］*Genesis and Developement of a Scientific Fact.* Chicago : Univ. of Chicago press.

[8] 乏しいエピソード風の記憶と日記と雑誌の源泉の欠如による人生に苦しめられて，私は掲載された素材のコンテキストとして未刊のノートと通信（手紙）に依拠しなければならない。私はまた，私の他の著述のなかのポールに関する記憶している文章を自由に引かせてもらう。

一方法であり，ゼロックスはほんの3年前に発明されたばかりであった。しかし私は彼の秘書差出しの覚え書き形式のポールの返事をまだ持っている。

親愛なるマートン博士

ラザースフェルド博士宛のあなたの手紙がオフィスに届きました。しかしながらラザースフェルド博士の論文「社会調査における類型手続きに関する若干の意見」のコピーを入手するまで返事が遅れました。あなたが要求した「事例研究の計量化」のリプリントと一緒にあなたのもとにお届けします[9]。

敬具

ローズ・コーン（秘書）2月20日，1941付

私がポールから受け取った最初の言葉は彼の秘書を通じてであった[10]。これは，彼が新しく開発したアイデアに基づいて論文を完成させることに一生懸命であるとか，新設のラジオ・リサーチ・オフィスが活発で影響力を持つことに忙しいときに，ポールの通信の典型であった。しかしながら，2ヶ月後に，私はポールから直接の返事を聴いた。

丁重，礼儀正しいでは決してなく，彼は自分の思考法と私の思考法の形式的なつながりを素早く見つけつつあった。

親愛なる　マートン教授

今日まであなたのリプリントのお礼を述べるのを待たせたことをお詫びしなければならない。私はそれらを真っ先に読みたかったのだが，あなたがご承知のように学事歴の間は研究の時間がほとんどとれない[11]。

私はあなたの論文が非常に興味深いことに気づいた。私のクラスで複雑な主題の概念化の成功例として社会構造の解剖に関するあなたの論文を使用しようと思う。あなたがそこで使用しているスキームはあなたが私に依頼したペーパーで私が取り上げた類型的

---

[9] typological procedure に関する論文は *Zeitschrift fur Sozialforschung* 1937, 6, 119-139
quantification of case study に関する論文は *Journal of Applied Psychology* 1940, 24, 817-825. 著者は（ラザースフェルドでなく）統計学者で社会学者の William S. Robinson.

[10] 彼女は並みの秘書ではなかった。当然大学院に進む決心をし，結婚後 Rose Kohn Goldsen となり，コーネル大学で最初の女性教授を許可された。

[11] ポールが「マートンと一緒に仕事をして（Lazarsfeld 1975 : 35）」で触れているように，1939年にラジオ・リサーチ・オフィスをプリンストン大学からコロンビア大学に移すにあたって，彼は教員の地位のない名目的な講師の肩書きを与えられていた。我々の抱き合わせの任命がやってきて，ポールは終身の准教授，わたしは終身でない助教授になった。我々が初めて出会った時に，「私がチューレン大学社会学科教授で主任の地位を棒に振る降格人事の著名な離れ業の受益者になった」とポールは述べた。

分類に関するアイデアと近い。後略

それは同僚の作品に対するポール流の典型的な反応であった。彼は永遠に他者との科学的つながりを求めて手を伸ばし続けた。彼は論文「社会構造とアノミー」の内容と理論的側面に関心がないことを表明せず,「個人の適応様式の類型」の方法的側面（それは同調行動と逸脱行動のパタンに多様性が構造的に収斂する）にだけ注目する。その類型は社会調査では珍しい一種の 4 重分類である。それは, 彼の距離のある仲の良い同僚サムエル･スタウファーが彼にその分析的潜在可能性を印象づけて以来，定性的・定量的 4 重相関表を器用に使用してきているポールにとって親和的であった。今振り返ると，それは我々が実際に異なった思考スタイルの可能な結びつきに出会う前の最初の交流であった。それは 35 年にわたる関心の共有と補完の数多くの発見の前身であったことがわかる。

1.3　準備なしの最初のコラボレーション

我々の抱き合わせの任命が我々自身の意図した事柄でなかったように，大学に私が到着して二ヶ月も経たないで起こった我々のコラボレーションも我々自身の意図した事柄でなかった。年長でランクが上であったのでポールはディナーにマートンを招待した。典型的ポール流のしつっこさで彼は次の趣旨の言葉でドアのところで挨拶をした。「私は悲しいニュースと素敵なニュースを持っている。私は “事実と図のオフイス”（the Voice of America の前身, 戦時情報局（OWI）の前身であったワシントンの一機関）からたった今電話をもらったばかりだ。彼らは私にラジオ番組の緊急テストをしてほしいと望んでいる。コロンビア放送システム（CBS）に私と一緒に行って, これらのテストをどのように行うのかを見にいかないか」。

我々は別々に向かって，ラジオスタジオに初めている自分を見つけた。そこには 2 列か 3 列に腰掛けた 20 人ほどの男女がいた。かれらは自分が聴いたラジオ番組が好きだった時には椅子に付いている緑のボタンを，好きでなかった時には赤のボタンを押すように指示されていた。ポールが何にも知らない私に説明したところでは，これらの反応はラザースフェルド-スタントン番組アナライザーとして知られる万年筆の手書きポリグラフに記録された[12]。ひとりのアシスタントが聴衆のメンバーに彼らのポリグラフに記録された反応の理由をインタビューし始めた。ラザースフェルド-スタントン番組アナライザーは私にとって全く初め

[12] 3 年前ポールはロックフェラー財団によって創設されたラジオ・リサーチ・プロジェクトのディレクターになっていて, そこでオハイオ州立大学心理学博士課程を修了して, CBS の初代のリサーチ･ディレクター，10 年のちに会長になっていたフランク・スタントンと知り合った。ポールはのちにスタントンをコロンビア大学応用社会調査研究所の前身のディレクター会議の議長にリクルートした。

てのものであったが，インタビューは初めてではなかった[13]。何も知らずに，私はインタビューの適切さに疑問を提起する走り書きのノートを端に座る我々の隣のポールに手渡した。「誘導尋問が余りに多すぎる。あなたが私に語ったことへの注目の不十分さが反応のポリグラフ上の頂点にあった」。それは典型的なポール流の懐柔の仕方であった。新しいパネルのリスナーがまもなく到着する，私に彼らにインタビューを試みてみないか，と意見を述べた。私は餌に飛びついた。ポールは見たもの聞いたものを気に入った。

それから，ディナーがとっくに終わってしまったことをそれぞれの配偶者からはっきり伝えられていたので，我々は見たことがない豪華なキャビアとシャンパンで親しい仲間の出現を祝福する最寄りのロシア風ティ・ルームに寄って，そこでお互いの発見の雰囲気の中で数時間を過ごした。ポールは翌朝ポリグラフとインタビューの分析に取りかかるつもりであると言った。私も加わっても良いか尋ねた。一週間かそこらのレポート義務でもって，週末とそれに続く数日は我々をハードに働かせた。これが最初の思いがけないコラボレーションであった。ディナーにやってきた人物がほぼ1世紀の3分の1も滞在することになった。最初はORR（ラジオ・リサーチ・オフィス），それからその後継the BASR（応用社会調査研究所）に。

それはポールの実業家的自己と仲間的自己が一緒に活躍しているのであった。彼は我々のコラボレーションについて彼の回顧談の中で次のように告白した。「ロシア風ティ・ルームでの祝福すべき悪戯の私の目的は，マートンのコラボレーションを調達することにあった。このひとつのプロジェクトだけでなく，研究所の共同ディレクターとしても（Lazarsfeld 1975 : 36, 37）」。

コールマンが彼の院生時代を振り返って述べているように，ポールは彼が興味を抱いた同僚，教え子が彼が重要と考えた問題に少なくとも時間の一部を割かないのを見るのに堪えきれず，彼らにそれをさせるために利用できたあらゆる餌を使用した。彼の周りの一部の者はこれに飛びつき，順調に育った。他の者は独裁的なやり方を嫌ったが，それでもアンビバレントに感じながら，順調に育った。もちろんさらに他の者は彼のもとから離れていった[14]。

ポールが回顧談で指摘しているように，最初の準備なしの，限定された，そして言わせて

---

[13] 私はハーバード大学学生時代インタビューを行うのをかなりの量体験していた。但し社会学科の公式のトレーニングの一環としてではない。そこは理論に大部分が充てられていたのでそのようなリサーチ手続きは教わらなかった。経験の一部はフランクリン・ルーズベルトの連邦政府のWPA（Works Progress Administration）によって後援されたプロジェクトで得られたものであった。それは当時フーバービルと鉄道地区の住民として描かれた人びとのセンサスと理解を獲得することが意図されたものであった。後者は仕事を求めて旅行する出稼ぎ労働者と働かずに旅行する放浪者にとって格好の停留地となった。

[14] ［訳注］原文にはコールマンの出典が示されていないが，訳者の調べによると，Coleman 1990b : 87, 88, 1980 : 168.

もらえばアンビバレントなコラボレーションは，the focussed interview と呼ばれる新しい技法を生み出した第二次世界大戦中のあるリサーチ・プログラムに私が関わるほんの助走に過ぎなかった（Lazarsfeld 1975 : 49）[15]。私がこの新しいタイプの focussed group interview の詳細を編纂するように導かれたのは，ポールによる執着と嘆願の入り交じった強い催促においてであった。それはサムエル・スタウファー，カール・ホブランド・グループとの私の共同作業の中で生まれたものであった。彼らは『第二次世界大戦における社会心理学研究』全 4 巻に報告される広汎な戦時研究に従事していた[16]。個人の仕事よりむしろチームの仕事に典型的にコミットする中で，彼はこれはまずパトリシア・ケンダール，次にマジョリー・フィスケの援助を受けて進むべきことを見ていた。うたがいもなく focussed group interview はかなり正確な意味でポールと私のコラボレーションの初期の成果を代表する。ポールとの出会いがなかったなら，応用社会調査研究所となるものの前身に彼とともに私が加わらなかったなら，私は確かにこの方法論的問題に取り組むことはなかったし，その技法の編纂に向かうこともなかったろう。

このエピソードは 35 年の長きにわたるコラボレーションの性質に最初の一瞥を与える。ポールが文字通り社会科学のなかの自分が選んだ領域の基本問題を同定し，それが解かれるのを見ることに取り憑かれていたことが，私に次第に明白になった。彼はその問題を誰が解くかに対して頓着しなかった。彼にとって興味のある科学的問題は多数で多様であったので，彼は自分だけでそれらのすべてを取り扱うことはできないことを認めざるを得なかった。ポールは彼のアイデア，コミットメント，情熱，ビジョンの渦の中に他者を巻き込む術を心得ていた。生涯彼は彼自身の作ったリサーチ組織の中であらゆる種類の仕事仲間（院生だけでなく様々な縞模様の同僚 —— 社会科学者，論理学者，数学者，統計学者，哲学者，老いも若きも，身近も遠くも ——）を懐柔した[17]。

---

[15] 特にリサーチ・ツールの巧妙なキットに興味を持ちながら，ポールは 20年前の回顧談の中で，市場で focussed group interviewで頻繁に使用されてきていることに気づきながら，その派生物である focussed groupが政治と政治キャンペーン大規模にかすがいのような源泉となるだろうということを予見しなかった。マーケティング・リサーチの会長 Leo Borgartは focussed groupリサーチに年間 2億5千万ドル費やされているものと見積もっている。その領域の他のエキスパートは数字を 10億ドルと見積もっている。

[16] Robert K. Merton/Patricia L. Kendall 1946 “The Focussed Interview.” *American Journal of Sociology* 51 : 541-557.
Robert K. Merton/Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall 1956 *The Focussed Interview : A Manual of Problems and Procedures*. New York : The Free Press..
ポールが指摘しているように，マスコミの効果に関する実験リサーチの一環であった the Focussed Interview の戦時中の発展は，『第二次世界大戦における社会心理学研究』第 3 巻 Carl I. Hovland/Arthur A. Lumsdaine/Fred D. Schffield 1949 *Experiment in Mass Communication* Princeton, N.J. : Princeton Univ. Pressch. 4 で報告されている。

[17] わがままなしかし究極的には無私無欲の懐柔は，1940 年代と 1950 年代のコロンビア大学の教え子であったジェームズ・コールマンとデーヴィッド・シルズによって活字で捉えられている。
James S. Coleman 1980 “Paul F. Lazarsfeld : The Substance and Style of His Work.” in Robert K.Merton/

1.4　びっくりするほどちぐはぐなカップル

我々をあり得ないコラボレーションとして描く際に，仲違いしている同僚達であったロバート・マッキーバーとロバート・リンドによって我々がコロンビア大学に招聘されたことに私はあまり言及しなかった。その表向きにおいては，ポールと私は，明らかに「ちぐはぐなカップル」と言わなければ「不協和なペア」であるように思われた。

ひとつには，我々は全く異なった教育背景を持っていた。ポールは数学と心理学を専攻し，私は社会学と科学史という全く異なった流儀の中で生育してきた。

我々の研究スタイルもまた大いに異なっていた。30歳で，彼の最初のリサーチ組織（ウィーンの経済心理学研究所）を設立した時から，ポールはずっと組織を通じてでなければリサーチをすることを想像できなかったのに対して，私は教え子とたまたまのアドホックなコラボレーションをすることを除いてリサーチ組織で仕事をするという考えを催したことのない頑固な孤独者であった。

我々の研究スタイルは他の次元でもまた対照的であった。ポールはパネル法，潜在構造分析家という方法論者で，有力なリサーチ技法の発明者であったのに対して，私はいくらか経験的傾きを持つものの，実質的な社会学的パラダイムを重視する正真正銘の社会理論家であった[18]。

我々の顕在的，潜在的理論嗜好もまた材料的にも大いに異なる。ポールは実務的な方法的にはわがままな実証主義者であるのに対して，私は実証主義に関して疑念を持つトマスに近い。私の最初の掲載論文で，実証主義には目が覚めたブージャムを採用するよりもむしろ敢えて風刺してきた[19]。

我々が知っての通り，我々がコロンビア大学に就任する前に仕事をしてきた実質的分野は全く共有するものがなかった。わたしがまだテンプル・カレッジに21歳の在学時に，ポールは19歳ですでに『若者と職業』というモノグラフを出版していたし，職業選択に関するこの統合的な著作の後，まずウィーンで，それからニューヨークで，失業を研究し，市場調査で雑多な問題を研究し，ラジオと新聞に対するオーディエンスの反応という独特の洞察力に富む研究を進めていた。決定的に違うのは，私の前半のリサーチにおける注目の実質的焦

Matilda White Riley（eds.）*Sociological Traditions from Generation to Generation : Glimpse of the American Experience.*　Norwood, N.J. : Ablex Publishing Corpe. pp. 153-174. esp. 167-168.
David L. Sills 1987 “Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976 : A Biographical Memoir.” in National Academy of Science, *Biographical Memoirs*.　Washington : The National Academy Press. pp. 251-282.
David L. Sills 1996 “Stanton, Lazarsfeld, and Merton - Pioneers in Communication Research.” in Everette E. Dennis/Ellen Wartella（eds）*American Communication Research- The Rememberd History.*　Mahwah, N.J. : Lawrence Erlbaum Associates. pp. 105-116.

[18] ここでのパラダイムはクーン以前の用語の意味である。

[19] ルイス・キャロルの英雄詩体の詩『スナーク狩り』の読者は，ブージャムは特に危険な種類のスナーク（最も捕らえにくい架空の動物）であることを思い出すであろう。

点は，近代科学の登場という歴史社会学，社会制度としての科学概念，知識社会学，意図的社会行為の思いがけない結果，官僚制の構造と働き，逸脱行動の構造的源泉のような理論的問題のような事柄にあった。

スタートからそしてある期間続いたことから明白なように，我々の知的スタイルと関心の対照性は（純粋ないしアカデミックリサーチと区別された）応用社会調査に対するそれぞれの態度にも頭をもたげた。もちろんポールは彼の生涯を通じて応用社会調査の不屈の提唱者であった。それに対して私は応用社会調査をやや腐った社会探究様式とみなし，精々科学と技術の社会学の見地から考察されるべき主題とみなしていた[20]。ポールに出会う前に，私は応用社会調査で実際に仕事をする自分を考えることができなかった[21]。

この事柄をこれ以上追求しないためにポールと私は初めて出会った時にはちぐはぐなアカデミック・ペアであった。ローカルな人びとのイメージは，きっと我々二人は公然と敵対するように宿命づけられないなら，頑固な（手のつけられない）正反対者であっただろう。きっと当時の知り合いの観察者で，生涯にわたるコラボレーションのあり得ない予測をした者はほとんどいなかったであろう。それでは明白だった不調和がどうやって調和に転じたのか。ローカルな派閥論争に巻き込まれることを避けたとして，いかにして我々はそれぞれの別々の道を進まなかったのだろうか。さらに長く続いたコラボレーションの基礎，性格，進展は何であったか。これらは答えられるよりもはるかに尋ねられる方が容易い質問であるが，コラボレーションに中心をおく回顧談では避けられない質問である。

2. 選択的親和力[22] elective affinity

イソップ以前におそらく，イソップ以後には確実に，見せかけはしばしば欺くことが観察されてきている。見せかけは様々な仕方で欺くことが判明している。時には注意があまり明白でないものを犠牲にしてもっとも明白なものが限定されているという理由だけで。ポールと私がじきに気づいたように，我々両者の明白な対照性は様々な選択的親和力，はるかに共通な地盤を覆い隠している。その上，あまり目立たない認知的親和力，社会文化的親和力は

[20] 彼のコラボレーターの好みと気まぐれにびっくりしながら，ポールは彼自身が強く好んだリサーチに対する私の距離を置いた態度に気づいていた。「研究所の以後の拡大はマートンの管理者と「政治的」貢献がなければ不可能であったろう。しかし彼は決して組織人ではなかった［この含蓄のある言明にのちで触れる］。しかし応用社会調査の問題は常に彼の知識社会学の最重要な関心の一部であった。両者が連結される様々な道を辿ることは難しくはない（Lazarsfeld 1975 : 37）」。

[21] 応用社会調査の私の以前の経験はホームレスの WPA 研究に限られていた。その仕事は愛情に発する労働，共産主義的公共精神から行われたものでなく，1930 年代初めのハーバードの奨学金（フェローバック）によって提供された乏しい給費を補う夏期の補助を提供するので行ったことを私は告白する。

[22] 化学用語「elective affinity」を一定の諸個人間の牽引，持続的人格的紐帯の基礎という普遍的な心理・社会的メタファーに変換したのはゲーテの心理小説『親和力』であった。

我々が出会う以前か我々が互いの作品を読み合う以前のポールの仕事のスタイルと私のそれの一部であったから，それらは平たく言えばのちの相互の影響か一方的影響の結果ではない。

2.1　概念の明確化

外見でポールは方法論者で私は理論家というしばしば指摘される対比が通用しているが，それはミスリーデングである。我々双方は基本的には概念の明確化に関心があった。それ自身の明確な哲学のためではなく，それらを社会的，心理的実在に関する理論に先導された経験的リサーチに取り込むための通過点として。我々が異なったのは概念の明確化を求めて進むために選んだ道であった。ポールはリサーチ方法と手続き[23]を考案することによってそれを行ったのに対して[24]，私はさもなければわかりにくい社会的実在の選択された側面に照射することが意図された内容分析によって「社会的行為の予期せざる結果」「アノミー」「役割集合と地位集合」「顕在的機能と潜在的機能」概念を明確化することに従事した。概念の明確化への主要な関心の選択的類似性は，観察可能な指標，観察できない概念のインデックスを考案する問題に我々が独立に注目を払ってきたことに現れている[25]。しかしながら，広く知られているように，方法的戒律を引くことによって指標形成の技法と科学を大いに前進させたのは，ポールであって私ではない。

概念明確化への基本的関心の共有は研究のための個別主題の選択の類似パタンに導いた。一部例外があるが，我々のどちらも繰り返しの研究のために選んだ社会現象，社会心理現象に主要な永続的関心を持たなかった。外見にも拘わらず，ポールが私同様，内容のスペシャリストでなかったことはほぼ当初から私には明白であった。確かに，彼はラジオリサーチ事務所を主宰したが，労働経済学者が持続的にそして限定的に労働市場の動きに関心を払ったのと同じ意味でラジオという主題，もっと広くマスコミに限定的持続的に関心を払うことは

---

[23] 例えば，個人特性（ウィリアム・ジェームズの「分別のある人」）のような概念や「社会的凝集」のような社会学的概念の意味を明確化しようとする「なぜを尋ねる方式」「コンテキスト分析と多変量解析」「潜在的構造分析」。

[24] ポールの概念明確化の手続きの主要であるのに長く無視されてきた事例は，“Methodological Problems in Empirical Social Research” である。長く無視されてきた理由はその初出がかなり入手が難しい Transactions of the Fourth World Congress of Sociology（1959）であったことにあろう。今日では Raymond Boudon（ed.）1993 *Paul Lazarsfeld : On Social Research and Its Language.* Chicago : Univ. of Chicago Press. に収録されているのでアクセス可能である。

[25] 私はポールが概念・指標問題にそもそも関心を払った源泉についてポールが私に語った記憶もなければ，書かれた記録も持っていない。20世紀初めのウィーンの注目すべき知的環境についての彼らの共有する初期の彼の思い出の中で，Hans Zeizel は Otto Neurath が社会指標のアイデアのパイオニアであったことを語っている。しかしもちろんこれは概念と指標形成の論理に明確に言及する必要はない。ポールに捧げる論文集（1979）所収 Zeisel “The Vienna Years” の注（p. 13）を見よ。私の初めての二本の掲載論文（1934）が明確にしているように，概念と指標問題への私の関心は第一にデュルケム，第二にタルドに由来する。see Merton 1994 “Durkheim’s Division of Labor in Society : A Sexagenarian Postscript” *Sociological Forum* 9 : 27–35.

なかった。もちろんマスコミ研究を広く公認された下位学問として築くのに力があったことは否定しない。また市場調査が社会学者によって大体忌避されていた商業企業に浸透する以前に，主要な下位学問として彼が実質的に築いた消費行動のパイオニア的リサーチをずっと続けたが，彼は研究されるべきこの主題に永続的関心を持ち続けはしなかった。投票行動に対する彼の先駆的仕事は下位学問として築くのに大いに寄与したものの，彼はその主題に実質的な関心は持たなかった。もちろん他の社会現象よりも一部の社会現象に多くの注目を払った。それは彼の青年時代の価値に彼を連れ戻した例として，大学教員に対するヨゼフ・マッカーシーのイデオロギー糾弾の研究に強い関心を抱いた。しかし大体において，ポールはエミール・デュルケムが自殺という主題を発明的研究のために選んだのと同様，主題に内在的関心を持ったわけではなかった。

我々がたった今見てきたように，1941 年の我々の最初のコラボレーションまでは全く同様に，わたしもまた様々の主題を考察してきた。工業的発明のフロー，科学と技術と社会の交錯，官僚制構造，人種間の通婚，知識社会学，逸脱行動。しかし一時ポールの方法論的関心を触発した論文「社会構造とアノミー」は犯罪，非行，薬物依存のような逸脱行動に焦点を置いたものの，わたしは長年にわたって「アノミー理論と機会構造」に関する仕事に不定期に戻ったりしたものの，ポールがマスコミ，投票行動，消費行動に持続的関心を持たなかったように，私も内在的関心を持っているわけではない。上記の多様な主題の中で，唯一科学社会学だけが依然として内容的関心を残している。

2.2　狐か？ハリネズミか？それとも両方か？

他者達は，（私が述べてきたように我々は典型的にはそれらを様々なやり方で研究してきているのだが）多様な社会行動と社会構造をその社会的コンテキストの中で研究するポールと私のパタンを観察し様々に論じている。ポールの多様な主題の選択パタンに関するマリー・ヤホダ（Jahoda 1975 : 3-9.）の観察は，彼女をして多くのことを知っている狐とひとつの大きなことを知っているハリネズミという古代ギリシアのメタファーによる対比を採択することへと導いたし，主題選択の私のパタンについての類似の観察はそれぞれ独自にルイス・コーザー（Coser/Nisber 1975 : 88-89.）とロバート・ピアステッド（Bierstedt 1981 : 444）を全く同じメタファーに導いた[26]。

[26] たまたまピアステッドは予測した。著者がルイス・コーザーのマートンに適用された図の使用を読む以前に上記の線が引かれたことを知ることは類似した，そして独自の生起によってマートンに魅せられた者達を喜ばすであろう。「距離を置いた長い期間にわたる同僚を持つことは喜びをもたらした」は，多数の独自のアイデア，発見，観察の原則としての近似的遍在性のもう一つの的をついた事例を提供する。
　ギリシアの詩人アルキロクスによって引かれたメタファーの対比を我々の今日の注目への連れ出

メタファーを当てはめるにあたって，ヤホダは，狐であるかハリネズミであるかの基準は，多くのトピックの枚挙に自分の仕事を捧げるか，ひとつのトピックに集中するかである。続けてPFLは次のようであると主張する。

> 才覚と興味によって狐は彼の生涯を通じてそうであり続け，狐であることで尊敬される可能性を決して否定しなかった。しかし歴史的偶然はハリネズミを装うことを強いた。心では狐でありながら，ハリネズミであるかのように振る舞うことは彼に集合的に捉えられた社会科学の本質的な狐性に持続的に寄与することを可能にした(Jahoda ibid. p. 3)。

ポールのライフワークを上記のタームで特徴づけることによって，ヤホダは，ポールのライフワークを方法論に甚大な貢献をしたと見るブードンによるかつての特徴づけ（Boudon 1970）と袂を分かつ。それ故，ヤホダはPFLを厳密にはハリネズミに分類する。人はヤホダの読みよりもブードンにより近いにも拘わらず，それは第三の読みに余地を残す。私の気持ちでは，ポールはハリネズミでありかつ狐である。彼の仕事の側面で異なる。バーリンがメタファーによる対比ではっきり説明しているように，上記のカテゴリーは同じ複雑な個人に様々に適用可能であるという意味で相互に排他的であるものとして厳密に適用される必要はない[27]。

ハリネズミとしてポールは，彼の生涯をとりわけ社会科学の方法論を開発する（結果として経験的社会調査の系統的な手続き）という使命にコミットした。経験的社会調査を通じて行為の集計現象を理解することに実質的な関心を寄せた点で，彼はほぼハリネズミであった。彼の非常に多彩な研究のほとんどすべてを貫くのはこの二つの持続的関心である。ある職業を選択する，別の製品でなくある製品を購入する，別のラジオ番組（雑誌記事）でなくあるラジオ番組（雑誌記事）を選択する，別の候補者でなくある候補者に投票する，別のイデオロギーでなくあるイデオロギーを採用する。無限に多様なのはトピックスだけである[28]。マリー・ヤホダをしてポールを本質的には狐と描写させたのはこれであった。しかしそれらの概念の中核では，様々なトピックの大半はある重要なタイプの行為の事例であった。選択をすること，あるいは幾分拡張された意味で，意思決定に到達する。かくして我々のコラボレー

したのは，アイザック・バーリンのエッセーであった（Berlin 1953）。

[27] バーリンの「ハリネズミと狐」の最近の版（1986）の序論で，マイケル・ワルツァーは多くの者は彼のエッセーのある箇所を見落としていることを指摘する。たったひとつのハリネズミと複数の狐の区別は諸個人の間のみならず諸個人の内部にも貫通している（M. Walzar 1986 : p i）。これはもちろんほとんど内在的関心を持たず，方法論か理論的原理の的をついた事例を例示するだけの大いに多様な主題，現象の選択を語るかなり緩やかな狐の像に特に当てはまる。

[28] ニュー百科事典ブリタニカ第15版（1992）のポール・ラザースフェルドの無署名記事に，「ラザースフェルドは彼のリサーチで非常に多様なトピックに取り組んだ」とある（vol. 7, p. 211）。

ションに関する彼の原型的省察「マートンと一緒に仕事をして」でポールが通常力点が置かれるコロンビア就任以前のペーパー「意図的社会的行為の予期せざる結果」よりも「行為」に長く焦点を当てることを選んでいることは示唆的である。そうする際に，彼は我々が出会う以前に共有していたもう一つの共通基盤を同定することに従事した。ポールの行為の経験的分析という永続的関心は，社会調査のために有効な組織を作り出し維持するという永続的関心と相まって，研究関心の所在の恣意的シフトと思しきものを説明することに向けてずいぶんと進んできた。コメンテーター達は，彼が自ら創出してきたマス・コミ・リサーチや選挙投票リサーチを放棄したことに当惑を隠せないでいる。ポールがこれらの主題にほとんど内在的関心を持たず，対照的に歴史家によってしばしば証拠立てられる個別社会への持続的累積的関心をに気づくなら謎は解ける。マーケットリサーチ，マス・コミ，選挙行動は説明解釈される現象を提示し，これまで刃が立たなかった問題の実りある探求を可能にし，今後探求すべき新しい問題の発見を可能にすることによって豊富な戦略的リサーチの場を彼に提供した（Merton 1987： 18ff）。

2.3　同時に起こった社会的・認知的親和

そのように全くの認知的親和と並んで, 我々各々がコロンビア大学に来る前に行った決心，偶然，選好の副産物であった社会的・認知的種類の親和も存在した。これらの親和は我々双方にとって共振した独自の因果連鎖の偶然の交叉を伴ったので，同時発生として特徴づけられる。我々はそれらについて気づくようになるにつれて，上記の些細に思えるがシンボリックには重要に見える体験の重なりは更なる共通基盤を作った。

2.3.1　ポールのフランス贔屓と私のデュルケムへの傾倒

ポールは根深いフランス贔屓であった。ポールにとってパリ，特にソルボンヌが彼の私的世界の実質的中心であったことに気づくのに時間はかからなかった。ソルボンヌの訪問教授となるあらゆる招聘を受け入れるために他の仕事をアレンジし直すことができることを繰り返し夢見た。それは彼にはソルボンヌで名誉学位を授与されることを意味した。パリで過ごした彼にとって貴重な年月は，社会主義者青年のひとりの若きリーダーとして，そして経済心理研究所（社会現象，経済現象に心理学（社会学でない！）を適用することに捧げられた施設）として知られる研究施設の創設者としてウィーンで過ごした時期に継ぐものであった。

私の最初の二本の公刊された論文がフランス社会学，特にフランスの学者，デュルケムに充てられたことを彼が知った時，自分は救済される希望を失っていないと彼に結論を下させた。彼の飽く事なき好奇心が彼に実際にわたしの 1934 年の論文読ませた時にその意見は強

化された。というのは観察できない概念のための観察可能な指標を発明するという問題への私の初期の関心を彼は初めて知った。今度はそれが当時彼には未知であったデュルケムの遺産をのぞき見るように導いた。数年にわたってデュルケム独自の視点の価値と限界について我々は長年論じてきているので，ポールは次第に彼自身がごく初期から無言の社会学者であってきた可能性を思案し始めた。「この1931年の『若者と職業』, 1933年の『マリエンタール』という初期の作品には，私は当時彼の存在を知らなかったことを断言するが，我々が今日デュルケムに帰属させるもう一つの強調が存在していた」と1969年に出た回顧録の中で語っている（Lazarsfeld 1969：278）[29]。『マリエンタール』の序論で，我々が研究したいのは失業者ではなく，失業した村であることを強調した。しかしもちろんデュルケムへのこの回顧的言及は，ポールが科学的学問としてデュルケム流の社会学の自律性に気づくようになったバンテージ・グラウンドから書かれている。

まだポールのフランス贔屓も，のちのデュルケムの作品についての彼の詳しい知識も，彼を近代の経験的に傾斜した社会学の主要な創設者とみなす我々の仲間の一員にまでは導かなかったであろう。彼にとっては，そのターニングポイントを完成させたのはベルギーの統計学者で天文学者であったアドルフ・ケトレーであった。その判定は「社会学における計量化の歴史に関するノート」[30]に表現を見いだせるし,『社会科学国際百科事典』の項目「アドルフ・ケトレー」（ランダウとラザースフェルドの共同執筆）にはっきりと見いだされる。「ごく最近になってケトレーの社会学の仕事がしかるべく承認を受け始めた，そしてケトレーの貢献をまとめた後で，上記の理由だけでも，サートンがケトレーの『人類について』を19世紀の偉大な著作の一冊，社会学の創設者としてコントよりもケトレーを選ぶことに異論を挟むことは難しい」と結論している（Landau/Lazarsfeld 1968 Vol. 13：256）[31]。

2.3.2　偶然に重なる社会的・認知的ネットワーク：ウィーンとのつながり

ポールの科学史家ジョージ・サートンへの傾倒，ケトレーに対するポールの尊敬は我々が

---

[29] Paul F. Lazarsfeld 1969 “An Episode in the History of Social Research：A Memoir.” in Donald Fleming/Bernard Bailyn（eds.）*The Intellectual Migration：Europe and America, 1930-1960*. pp. 270-337.

[30] 初出 *Isis* 1961, 52：277-333. Patricia L. Kendall（ed.）1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* pp. 97-167.

ケンダールはその編著で次のように語っている。「ポールをコロンビア大学の社会科学ケトレー冠教授第1号と名乗らせたのは, ケトレーが経験的社会調査の創設者であったという彼の得心であった。独立した学問としての社会学に対するポールのアンビバレンスを所与とすれば，それが社会学でなく社会科学であったことは符合する（Kendall 1982：349）」。

[31] ポールの目には，デュルケムは同定された期間にある社会現象に繰り返し現れる識別できる規則性に唯一の体系的説明であるケトレーの平均人の理論にクレジットを与えたことで，大きなクレジットを獲得した。これはデュルケムが平均人の理論を厳しい批判にかける以前のことであった。Emile Durkheim［1897］1951：300-306.

出会う前の彼と私の社会的･認知的ネットワークのいくつかが重複することを反映している。それはたまたま私がサートンの徒弟であったためであった。サートンが彼の国際雑誌 *Isis* のある巻の序文として「ケトレー」に関する長い論文を書いていた 1934 年のハーヴァードの科学史ワークショップに遡る[32]。ポールがケトレーに同じ注目をしていることを知って，私は彼にサートンの論文を教えた。たとえ我々が詳細に関しては一致しなくても同じ波長の上にいた感覚を与えた。ポールはサートンが論文を書いたほぼ同じ時期に，ポールのコラボレーターであるハンス･ツァイツェルが『マリエンタール』の付録「社会史に向けて」にケトレーの計量研究に対する素晴らしいできばえの批判的分析を掲載したことを指摘した[33]。今度は私がジョージ・イーストン・シンプソン[34] の手になる 3 頁のリサーチ・リポートからのひとつの表をリプロジュースするために選び出したことを指摘した時に，共有された偶然の一致がさらに重なったことにポールは即座に同意した。

ポールは同じ種類の他の偶然の一致を指摘した。彼が『メモワール』でたまたま報じているように，「若者と職業」に関する彼の 1931 年のモノグラフと 17 世紀英国の科学と技術と社会の錯綜に関する私のモノグラフに，他はおよそかけ離れているように見える我々の作品に「宗教と職業選択」に関する似た表が存在した[35]。上記の間欠的に発見された偶然の一致は当初全くかけ離れていた一組の協力者の関心と体験の重なりの象徴的しるしであった。

そのような象徴的な符合は他にもあった。か細いものであったが私がウィーンとのつながりを持つことを知って驚きの喜びを示した。ナチスドイツによるオーストリア併合の 1 年前の 1937 年夏に，私は地方人のベターな感覚を持って私のアカデミックなドイツ人に関する狭い知識を増やすためにウィーンに行く決心をした。おそらく私の師匠ジョージ・サートンか彼の娘で詩人のメイ・サートン（その夏に彼女はウィーンにいた）から，ウィーンの教師

---

[32] George Sarton 1935 “Preface to Volume 22（Quetelet）” *Isis* vol. 23 : 4-24.
cf. R.K. Merton 1985 “George Sarton : Episodic Recollections by an Unruly Apprentice.” *Isis* 76 : 470-486.

[33] Hans Zeisel［1933］1960 “Zur Feschichte der Soziographie.” in Marie Jahoda/Paul F. Lazarsfeld/ Hans Zeisel. *Die Arbeitslosen von Marienthal*. S.101-138. esp. S.108-111.
American edition, 1971 *Marienthal : The Sociography of an Unemployed Community* pp. 99-125. esp. pp. 106-109.

[34] 彼はテンプル・カレッジの若い講師で，たまたま彼はそこに在学していた私をまだかなりエキゾチックであった社会学分野に招き入れ，ハンス・ツァイセルが遠く離れたウィーンで引用したリサーチ・助手に私を使ってくれたのであった。
ツァイセルの表を引いたシンプソンの論文は下記の通り。
G.E. Simpson 1931“Negro News in the White Newspapaers of Philadelphia.” *Publication of the American Sociological Society.* 25（2）: 157-159.
『マリエンタール』オリジナル版 p.129，アメリカ版 p.123 はこのペーパーの年を 1900 年と誤記，それだとシンプソンが生まれる数年前になってしまう。
シンプソンの博士論文に進化した完全なモノグラフは，The Negro in the Philadelphia Press（Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press 1936）として出版されている。

[35] Paul F. Lazarsfeld 1931 *Jugend und Beruf : Kritik und Material.*
Robert K. Merton 1938 *Science, Technology and Society Seventeenth-Century England.* ch.6.

で慈善家の，女医ユージェニー・シュワルツバルトによって管轄されていたグルンドジーのザルツカンメルグート村の避暑地「ジーブリック」のことを耳にしていた。そこは作家，芸術家，詩人，作曲家，音楽家，（興行を提供するためにたまたま滞在していた）俳優が頻繁に訪れるところであった。

その単なるエピソードの記憶が私に女医とジーブリックについてのポール自身の思いでの詳細を思い出させただけではない。幸運なことにマリー・ヤホダ嬢がポールと結婚する前の彼女自身の若かりし幸せな思い出を私が引き合いに出すことを可能にした[36]。

> 女医シュワルツバルトは彼女の周りの若い男性全員を魅了する特に目立つ女性であった。彼女はラルフ･ネーダー，マイケル･ヤングのような社会制度の偉大な発明家であった。彼女はウィーンに少女のための最初のギムナジウムを設立した。彼女はウィーンに文化の中心を結成し，ポールは彼女のサークルに所属していた。ポールがそこで彼の初期のガール･フレンドと出会ったものと思っている。1919年に，彼女はイシュルのウィーンの子供達のためにサマー・キャンプを組織した。私はそこの雇われたヘルパーのひとりであったポールと出会った。わたしは12歳，彼は18歳であった。そこで彼は彼の最初の質問紙であったものを組み立てた。毎晩我々200名の児童は我々が最も好きな若いヘルパーを数え，なぜかをチェックしなければならなかった。翌朝，掲示板に人気リストが載った。ジーブリックは18歳以上の者のためのものであった。私は噂からそれを知った。

女医のジーブリックでのあり得ない滞在をポールが知った時，それは我々の間の共通地盤感を広げた。というのは話っぷりから，そこはポールが社会調査の彼のライフワークを開始した彼女の地球慈善事業のひとつであったから。私はおそらく彼とウィーン，ジーブリックでは会うことはできなかったろう。というのはロックフェラーのトラベル奨学金は私がオーストリアを訪れる数年前にポールを合衆国に連れて行ったから。

ポールと私はマーク・グラノベッターが言う「弱い紐帯の強さ」の更なる証拠に驚かされた[37]。ポールがウィーンに住んでいた時によく知っていた幾人かのオーストリアとドイツの科学者と私が弱い紐帯を築いていたことが判明した。これらの科学者は経験科学の哲学に共

---

[36] これはマリー・ヤホダからの手紙（1996,5,16日付）彼らの初期の年月を過ごした女医シュワルツバルトでのポールと彼女の体験について少ない言葉で語ってほしいという私の要請に応えたものであった。

[37] Mark S. Granovetter 1971 “The Strength of Weak Ties.” *American Journal of Sociology* 78 : 1360-1380.
Mark S. Granovetter 1974 *Getting a Job : A Study of Contracts and Careers.*

通の関心を表明した1920年代に登場したウィーン・サークルと様々に結びついていた。

彼のメモワールでポールは，ウィーン時代，自分はウィーン・サークルと実質的には一切接触がなかったことを思い起こしている。彼らの教えと私の初期の仕事の明らかな類似性は，直接の影響を受けたというよりむしろ共通の背景（マッハ，ポアンカレ，アインシュタイン）に由来するであろう[38]。にもかかわらず，マリー・ヤホダが記憶していたように，科学哲学者と論理実証主義創設者としてウィーン・サークルの主要人物となったポールとルドルフ・カルナップが大学の若き知識人によって設立された学際セミナーに導きの光であったというのは正しい（Jahoda 1969 : 431）[39]。Hans Zeiselがウィーン時代のリコレクションの中で「当時カルナップはポールにとっても，ポールの教え子達にとっても，偉大な出来事であった」と証明している（Zeisel 1979 : 11）。

ポールは彼のアメリカの新しい同僚が彼自身のカルナップとの接触を証明する文書を提供した時びっくりした。私はカルナップが1936年にハーヴァード・ターセンテナリー祝賀会を訪れた時に彼とちょっとだけ会った。そしてカルナップの講義「Logic」を含むターセンテナリーシンポ全2巻を書評し，その作品を私の博士論文で引き合いに出し，「彼の最近の論文，“Testability and Meaning”はウィーン・サークルの他のどの陳述よりも社会的データの分析に容易に適用可能であると思う」という生意気な手紙をカルナップ宛に送った[40]。私は通常講義でウィーン・サークルの大立て者，ポールその他の同時代人によっても絶賛されているオットー・ノイラート[41]の社会科学哲学に関する彼の基本的仕事をしばらく学ぼうと思った。しかしながら，ポールはカルナップ論文についての私の抜き刷りに詳しく注釈付けたと，但し書きをつけた贅沢な意見の許しを私に送って寄こした。ポール自身その有名な論

---

[38]「政治的出来事に積極的に参加した者にとって自然な分野は国家科学（経済学，政治理論と強く融合した法学の学位）であった。しかし私にとっては，数学が2番目に惹きつけられた自分（ポール）であった。私が応用数学の博士号で終了したのはほとんど偶然なことであった（Lazarsfeld 1968 : 273-274.）」。David L. Sillsは彼のメモワールの中で「ポールの博士論文は「火星の運動へのアインシュタインの引力の法則の一適用」であったと語っている（Sills 1987 : 255）」。

[39] Marie Jahoda 1969 “The Migration of Psychoanalysis : Its Inpact on American Psychology.” in Donald Fleming/Bernard Bailyn（eds.）*The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960.*

[40] Rudolf Carnap 1937“Logic”in *Factors Determining Human Behavior* pp. 107-118. それは確かにジョージ・サートンの雑誌Isis, 1938, 28 : 151-154で2巻のシンポジウムについての私の非常に走り書き風の書評のほんのひとつのかなり情報不足の文章が与えられたものであったが，私の著書『17世紀英国における科学と技術と社会』にも引かれている。p.110n.

Rudolf Carnap 1936, 1937 “Testability and Meaning” *Philosophy of Science*. 3 : 420-471, 4 : 2-40.

私のカルナップ宛の手紙は1938年10月31日付。

[41] 私は博識なオットー・ノイラートにはお目にかかったことはないが，彼の息子ポール・ノイラートには度々あった。彼はコロンビア大学博士課程に在籍し，研究所にもいたことがあった。

Paul Neurath 1995 “Otto Neurath : Leben und Werk.” *Enzyklopadie und Utopie.* vol. 30

Paul Neurath/Elisabeth Neurath（eds.）1994 *Otto Neurath oder Die Einheit mit Wissenschaft und Gesellschaft.*

Marie Neurath/Robert S. Cohen（ed.）1973 Empiricism and Sociology : *With a Selection of Biographical and Autobiographical Sketches*. esp. 1-83.

文を「disposition 概念」の形成の詳しい分析の中で引き合いに出している[42]。

一例を言えば，彼らの成熟まで存続したウィーン時代の同輩との（敵対的とまでは言わないが）素っ気ない関係は，わたしが社会的・認知的ネットワークに入っていくのを妨げた。科学哲学（特にカルナップ）への私の関心を知りながら，ポールは若いカール・ポッパーをかなりいやな若者として思い出し，彼の『探求の論理（1935）』に，わたしが短いオーストリア滞在中に出会った世界的名声の成熟した哲学者カール・ポッパー卿に，疑問を表明し続けた。彼らはそりが合わなかったことは明白であった。疎遠であった時代を振り返って，マリー・ヤホダは書いている。「PFL とカール・ポッパーとの反目は女医シュバルツバルト・サークルで生じた」と。私（ヤホダ）は KP のやや清教徒風の容貌が PFL のライフ・スタイルと衝突したのだと思っている。私（ヤホダ）は KP をよく知っている。我々は 2 年間ウィーンの教育施設（我々はそこで初等学校教師の訓練を受けていた）で同僚であったから」[43]。

数十年のちに英国人ノーベル医学賞受賞者 Peter Medawar（ポッパーの親友で私の良き友人）は私が頻繁に英国を訪れている期間のある機会に，私がポッパーと会うための斡旋をしてくれた。しかし彼は決まって失敗した。この繰り返しの失敗の謎は最近になって解けた。ポッパーから Michael Cavanaugh（ポッパーの科学社会学批判を批判する論文を書いた人物）宛の手紙のなかで。型にはまらない優しさ, 自己批判的スタイルで, ポッパーはポールとポールの同僚と彼自身を三角測量した。

> 私は彼を十分に研究しなかったことではなく，あらゆるものを読むことができなかったことで, マートンに不実でアンフェアであったことを詫びる。私がマートンに関して知っていたのは，マートンがラザースフェルドの友人で，ある種の生徒でもあることを，ラザースフェルドによってだけでなく，他の人びとからも告げられていたからだ。科学方法論について語る時にはいつでもラザースフェルドは私について耳障りなことしか言わなかった。そこで私はマートンの仕事に深くのぞき見る誘因をほとんど持たないできた。深くそれを後悔している。私はできることならこれを修復したいと望むのだが，私の年では容易でないだろう。マートンと接触するチャンスがあったら，私の後悔を彼に伝えて，この手紙のコピーを彼に渡してくれたらどんなに嬉しかろう[44]。

---

[42] Paul F. Lazarsfeld 1966 “Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences : Some Historical Observations.” in Gordon J. Direnzo（ed.）*Concepts, Theory and Explanation in the Behavioral Sciences.* pp. 144-202, esp.at 175-181.

[43] Marie Jahoda の手紙（1996 年 5 月 16 日付）より。

[44] Karl Popper から Michael A. Cavanaugh 宛の手紙（1988 年 9 月 15 日付）コロンビア大学・マートン・アーカイブ
「弱い紐帯」が広い社会的ネットワークに役立った。今になってようやく私は医師ユージェニア・シュバルツバルトに対するポッパー自身の言及，自伝での言及を指摘する。彼女は飢えに苦しむ戦

この彼らしくないポッパーの詫びの言葉は，ポールを驚きと狼狽と喜びの入り組んだ気持ちで満たしたことであろう[45]。

ポールのウィーンの友人，知人の他者との引きずる関係はよりベターな運命と出会った。ウィーン・サークルで最も周辺にいたポッパーと違って，サークルの中心にいた人物 Philipp Frank（プラハ・ドイツ系大学でアインシュタインの後継者）と科学哲学者 Herbert Feigel は科学の社会学に強い関心を示した。合衆国に彼らが移住した後，その新興分野の会議にたまたま出席した私はポールと私のウィーンの社会的・認知的ネットワークの偶然の重なりを感じた[46]。

2.4　選択的親和力の重要性：パーソンズースタウファーの幻のコラボレーション

今日まで, 私は上記の選択的親和力はポールと私のすぐのコラボレーション, それからずっと続いたコラボレーションにとっても，親和的でおそらく肝要なものであったと得心している。我々が早々に我々の基底にある共鳴に気づかなかったなら，認知的好み，価値的好みの違いがおそらくコラボレーションを早々と停止に追い込んだであろう。この選択的親和力の重要性を私が信じたことが，この回顧談で我々のコラボレーションに思いをはせるほどに virtual conviction にまで成長してきた。それはまた私に, そのような親和力の欠如がタルコット・パーソンズとサムエル・スタウファーがハーヴァード大学で我々のようなコラボレーションを達成する努力を閉ざさせたという思いに駆らせる。

まったくうまく意図されながら失敗に終わった努力のストーリーがすぐに語られる。1940 年代前半，私のかつての師で同僚であったパーソンズは，当初はふとした偶然の，それからずっと続いたポールとのつながりの価値についての私の考察によって次第に印象深いものになった。私は経験的社会調査の達人（ポール）から多くを学んだだけでなく，我々の院生は我々のコラボレーションから生じた社会理論と経験的社会調査の混合にはっきりと乗り出し

後（1920 年代初頭）のウィーンの児童，学生，芸術家，知識人への援助を組織した最も注目すべき博愛主義者であった。「彼女はポッパーがオットー・ノイラートと出会ったことを記憶している非営利の食堂のひとつ the Akazienhof を設立した（Karl R. Popper 1973 “Memories of Otto Neurath” in *Neurath, Empiricism and Sociology*. p. 52）。もちろん，その人物は 15 年のちに，彼女のソンマーハイム・ジィーブリックでウィーンの知識人と交わることを親切にも許可してくれた女医シュバルツバルトその人である。

[45] ポッパーのポールに対する引き続き変わらない態度は彼が『限りなき探求：ある知的自叙伝（1976）』で一言も触れることができなかったことを説明するだろう。ポッパーはフレミング，ベイリン共編 *The Intellectual Imigration* に掲載されている Herbert Feigel “The Wiener Kreis in America”（pp. 630-673）の論文には多くを語っているのに，同じ書物に掲載されているポールの “An Episode in the History of Social Research”（pp. 270-337）には一言も触れていないのである。

[46] この社会的・認知的ネットワークの偶然の重なりは Gerald　Holton によって巧みに捉えられている。Gerald Holton1995 “On the Vienna Circle in Exile : An Eyewitness Report” in W. Depauli-Schimanowitch et al.（eds.）*The Foundational Debate*. pp. 269-292. esp. p. 274, p. 278.

た。その上，理論に導かれた社会調査の技法と職人技における我々の院生の教育は，院生にリサーチプログラムにおいて積極的役割を引き受けさせるそのようなトレーニングを与える，社会科学実験室というポールの発明から大いに恩恵を受けていた。ずっと以前，パーソンズはハーヴァード大学での同じようなコラボレーションと同じようなリサーチ実験室の可能性に関心を表明していた[47]。

社会的・認知的ネットワークはひとりの有望なコラボレーターをパーソンズが選抜するのに決定的な役割を果たした。数年前，独創的で実務的なサムエル・スタウファーとのコラボレーション[48]から解放されたポールが，彼（スタウファー）は現代の最高の社会調査者だと得心していた。その意見は，第二次世界大戦中軍隊の社会心理学と社会学で未曾有のフィールド研究を行った戦争省社会調査ブランチを設け，統括したスタウファーののちの業績によって裏付けられた[49]。ポールは「潜在的構造分析」モデルを導入することによって，リサーチブランチの方法論的仕事の実質的役割を担った。私は「焦点づけられたインタビュー」の形でリストに載った人物とのインタビューの手続きを編纂することによってポールに比べて慎ましい役割を担った[50]。ポールが主で私が従で，「サム・スタウファーがパーソンズとコラボレートする経験的調査の達人候補として素晴らしい選択であろう」という認証を認め

---

[47] ポールの私的なアーカイブズからの引用が証明するように，「社会科学実験室」というタームは，応用社会研究所が社会科学の大学院教員の研究単位となることを目指した，1944年のコロンビア大学管理当局と我々の交渉においてスタンダードになった。see Lazarsfeld《Memoir》333-334.

[48] Samuel A.Stouffer/Paul F. Lazarsfeld 1937 “Research Memorandum on the Family in the Depression.” *Social Science Council Bulletin* 29.

Paul の彼の友人，少し距離を置いた同僚についての査定に関して，Samuel Stouffer 1962 *Social Research to Test Ideas* の Paul の手になる Introduction 参照。我々の会話で，ポールは「サムは社会調査の分野で最も重要な人物である」としばしば口にした。

[49] Samuel A. Stauffer et al. 1949-50. *Studies in Social Psychology in World War* II. 4 vols.
The American Soldier は第1，2巻を構成する。

その大量の仕事の理論的，方法論的意義は次で早々と考察された。

Robert K. Merton/Paul F. Lazarsfeld（eds.）1950 *Continiuties in Social Research : Studies in the Scope and Method of “The American Soldier”*.

[50] Paul F. Lazarsfeld 1950 “The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis.（ch.10）” and “The Interpretation and Computation of Some Latent Structure.（ch.11）” in Samuel Stouffer et al.（eds.）*Measurement and Prediction vol. 4 of Stidies in Social Psychology in World War* II.

第4巻序文でスタウファーは「焦点づけられたグループ・インタビュー」の技法はそこでは論じられないと述べている。彼とリサーチブランチでスタウファーのアソシエートとして働いている実験心理学者 Carl I. Hovland の同意を得てコア技法は数年前に発表された次の論文に掲載されたので。Parricia L. Kendall/Robert K. Merton 1946 “The Focussed Interview.” *American Journal of Sociology* 51 : 541-557. ポールの勧めによって，その論文は一冊の本に増補された。R.K. Merton/Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall 1956 *The Focussed Interview.*

ホブランドへのかつての手紙で，ポールは彼のたぐいまれな管理者能力を発揮している。「親愛なるカール。ひとつの大きな管理者問題を取り上げさせてもらいたい。あなたがおそらく知っているだろう，マートンという人物が8月のいつからか草稿に取りかかった。彼はあなたのために彼が行った仕事を知識の有用な貢献にする形にすることに熱心である。それ故，彼はあなたのために週4日の大半を彼がいう焦点づけられた集団インタビューの編集に割きたがっている」。PFL to CIH, June 2,1943 Merton Archive, Columbia University.

た[51]。

パーソンズとスタウファーはともにそれは素晴らしいアイデアだと考え，1946 年にハーバード大学社会学科にスタウファーは加わった。両者の間に友好が交わされることはもはやなかった。彼らのパートナーシップの初年度，彼らのそれぞれの才能を確かめる共同の努力に割かれたが，ほとんどないか全くないことがすぐに明白になった。彼らはお互いを理解することができなかった。少なくとも，合同のリサーチ・プロジェクトで一緒に働くことも，彼らの双方が加わる理論とデータによって導かれた合成的な社会調査のための訓練実験室の設計に一緒に働くことも続かなかった。自暴自棄に思われた行為の中で，彼らは 1948 年春に一学期だけ合同で持つことを提案した。それは不可能なことが判明したが，我々は彼らのお互いに曖昧な視点のバーチャルな翻訳者の役割に同意して，週に一日わたしが出向くことを約束した。しかしその仲介されたコラボレーションの試みもまた失敗した。その一つのリサーチ・プロジェクトはパーソンズが「S.A. スタウファー／フローレンス・クラックホーン／タルコット・パーソンズによるボストン地区高校生の社会移動の研究（未刊）」と呼ぶものであった（Talcott Parsons 1951 *The Social System* p. 235）。彼らの間に影響の相互性はほとんど発生しなかったし，それ以前に，パーソンズは，コロンビア大学応用社会調査研究所のように，リサーチと指導の両方を与えるスタウファーが主宰する社会関係実験室にもはや加わらなくなった。善意と意思の共有は無傷のままであったが，選択的親和力と相互理解の欠如がタルコット・パーソンズとサムエル・スタウファーをそれぞれ別の道を進ませた[52]。

偉大な才能とコラボレーションの深いモチベーションという格好の条件と思えたものの下でさえ，一緒に仕事をすることは容易に到来しないのである。

3. 緊張　そして解決

選択的親和関係が我々の進行中のもつれたコラボレーションに影響をもたらしたように，我々の間の人格的緊張，認知的緊張にも影響をもたらした。この親和関係は我々の異なる認

---

[51] スタウファーの採用にあたって，社会的･認知的ネットワークの参加者としてポールと私は，またパーソンズに『アメリカのジレンマ』にまとめられる進行中のリサーチでスタウファーがベーシックな役割を果たしているほとんど知られざる事実について語ることができた。主査のグンナー・ミュルダールがドイツ軍がデンマーク，ノルウェーに侵攻したときスウェーデンに帰国するのが自分の義務と感じて帰国した。のちにその著作の序文でミュルダールが語っている。「私の不在時にプロジェクトを采配する重責を引き受けることにスタウファーは同意した。留保なく，彼は無私的に彼の才能と全エネルギーを 1940 年 9 月 1 日まで調査を完了する任務に傾注し，それに成功した」。Myrdal 1944 *An American Dilemma* vol. 1 : xii.

[52] 日記と雑誌が欠如しているので，パーソンズとスタウファーのコラボレーション失敗に関するこの紋切り型の説明は通信（手紙）に基づいている。RKM to TP（11/11/1947), TPto RKM（5/1/1957）。それは創立 20 周年を迎えた応用社会調査研究所の特別の性質に関する回顧的注釈を与えている。

知的関心と好みを超越するための基盤を提供した。その一方で緊張は我々にそれぞれの認知的関心と好みを維持するための基盤を再検討し擁護し，もっと自覚することを余儀なくさせた。それは我々の間の認知的緊張を単なる友好的顔なじみ以上の何かを通じて減じようとした場合に重要であった。この緊張の解消は長年にわたって続いた批判と修正の応酬を通じてもたらされた。認知的発達に導いたプロセスでなければ，認知的発達は公開された記録の事柄であった。しかし私は我々の間の人目に触れない対人的緊張について語るべきだ。それは主として仕事生活の送り方の好みの基本的違いに由来した。この緊張が脇に置かれる限り，様々のコストを払いながらも，我々のそれぞれが，時には気が進まなかったが，それにもかかわらず長く続いた協力者となるように導いたのは明確な調整と適応を通じてであった。

3.1　応用社会調査研究所

我々のワークスタイルの深い違いはまもなく我々双方にとって明白となった。かくして，我々のコラボレーションに関する彼自身の回顧の中で，ポールは私が長年の友人キングスレイ･デーヴィスに充てた随分昔の手紙を取り上げている。その手紙はラジオリサーチ･オフィスORR（応用社会調査研究所BASRの前身）に私が渋々加入したことを語っていた。

> その手紙はいくつかの興味深い特徴を持っていた。組織されたリサーチ・プロジェクトという発想はマートンにとって新しいものであったので，彼はそれに引用のしるしを付している。「一方で罠にはまったと感じるが他方で興味もあったというアンビバレンスのトーンがあった」。彼はその仕組みに印象を受けたが，その愛国の含意に言及することによって，軍事省内のサムエル・スタウファーのリサーチ・ブランチと密接なつながりのあるORRで仕事を継続する自分の決定を弁明しなければならないと感じた。しかしながら，彼の関心の主要な源泉に関しては何の疑問もなかった。彼はプラクテカルな問題と自分の中心的理論的関心の相関を見つめる機会を欲した（Lazarsfeld 1975 : 36-37）。

ポールは続けていっている。「研究所の以後の拡張はマートンの管理者と「政治的」貢献がなければ不可能であったろう。*だが彼は決して組織人ではなかった*（Lazarsfeld 1975 : 37.）」。最後のイタリック体の部分はサブテキストを持つ。その研究所はポールが早々に気づき，途切れ途切れに関心を払ってきたものの究極的凝縮であった。30数年にわたる副所長として研究所での生活に関する私のアンビバレンス。一方で，すぐに私は，リサーチとトレーニングの複合施設というポールの発明品はコロンビア大学独自の社会学の伝統として勃

興しているものにとってきわめて重要であることを納得した,。しかし他方で，研究所への深い関与は「孤独な学者」としてよく描かれる者に特有の強く好まれるワークスタイルの多くを譲歩することを要求した。私の内部の緊張は不可避的に我々二人の間の緊張を誘導した。決して完全に解消されることはなかったが，それは定期的な相互の調整を必要とし受け入れた（私の側は大部分で，ポールの側では時たま）。かくして彼は研究所の所長として成功するためには私は招集されないことに次第に同意するようになった。この適応は，その責任を「若い腕白達」[53] への相続に転換するはるかに幸福な合同決定に導いた。つまりかつての弟子達はポールを「管理に長けた学者」として描写するものになった[54]。しかし研究所に関わる事柄に関して，ポールは彼が所長としてサーバティカルとか訪問教授として不在の時には，私が臨時所長として働き，遠回りで何とか職務をこなした。

新たに見つかった半世紀前の覚え書きが，研究所の臨時所長のある日のアジェンダを記録している。それは狭いスペースにポールが彼の代わりに臨時所長を務める期間に私が直面する管理者の活動の類型について沢山のことが書かれていた。

たまたま同時になされるべき事柄のリストをこなした 2 日後，私はコロンビア大学博士課程の学生の口頭試問中に急に胸の痛みによって倒れ，軽い心臓発作のために 3 週間過ごすことになるセント・リューク病院に緊急搬送された。

にもかかわらず，振り返るとすべて楽天的な後知恵を別として，わたしは研究所は当時としては珍しい社会科学資源の集合を設置したものだと思っている。今日の社会学のメタファーの語彙では，長年にわたって重要な形式の社会関係資本，認知資本を提供してきたし，その複合的で進化した生命に参加した者に人的資本を大いに拡張させた。

3.2　行動科学上級研究センター The Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences

順調に成長する研究所が私の側に持続的で時として苦痛な譲歩を要求したように，十分に皮肉なことに，研究所の派生物がポールにはるかに大きな苦痛をもたらし，彼の側に一切の譲歩を引き起こさなかった。研究所の派生物とは行動科学上級研究センター（CASBS）で，それは新たに活動を開始したフォード財団からのグラントの下で 1954 年に創設された。その発足にポールが中心的役割を果たしたことを詳しく述べた，センターに関する本格的な歴史はまだ書かれていないが，幸いなことに，科学史家アーノルド・タックレイは役に立つ初歩的なスケッチを提供している（Thackrey 1984, 1987）。それはセンターが大体において上

[53] Charles Glock, David Sills, Allen Barton の三人は当時二人からそう呼ばれていた。

[54] 研究所のかつての若かりし時の所長経験者は，研究所での，そしてそのような大学に基礎をおく，リサーチ組織の位置に関して振り返っている。Charles Y. Glock（1979：23-36）, Allen H. Barton（1982：17-83）, David L. Sills（1979：411-427, 1996：105-116）

級トレーニングのための a professional school（専門的大学院）というポールの構想に由来することを明らかにしている。

そこにはパラドックスとアイロニーが存在する。というのは，スタート時から社会科学界の装いを新たにした制度的成功と広く定義されるようになったものは，その鍵を握る創始者にとって引きずる個人的敗北感であった。我々の間に決して完全に解消されることのない緊張を作り出した。

1940年代半ばに戻ると，社会学，社会科学における上級トレーニング法によってもっと多くのものを与えたいという必要に気づいていたのはポールひとりでなかった。復員兵に教育支援を与える復員兵援護法 G.I.Bill[55] から主に生じた大幅に増加した第二次世界大戦後の学部生に奉仕するにはファカルティ（教員）の数が理論的，経験的社会リサーチの近年の進歩に応えるには余りに少なすぎることが全国規模で明白となった[56]。

私は組織人ではなかったにも拘わらず，ポールはゼネラルな考えに対する私のアンビバレントな支持を安易に賛同者に含め，1950年までに，その年以前にできあがっていた彼のもともとの10頁の覚え書きを私と共著の長い「社会調査のトレーニングのための施設設置提案」に膨らました。（上級研究センター設立における私の役割に予測しがたい影響を及ぼすことが判明した）私のアンビバレンスは，ポールのプランの二つの要素に由来した。ひとつは，応用社会調査の実務家を養成することに過度の力点がおかれていること。もう一つは，目下の知識の上級センターでのトレーニングが「管理者的学者」を所長とする経験を積んだ序列化されたスタッフによって新興のリサーチモードで教えられた多数の学生と徒弟を抱えたプロフェッショナル・スクールで行われるという前提である。要するに，フォーマットが彼の息のかかった社会的発明（研究所）に似たその拡張であること。私の感じたのは，必要なのは，社会科学者が自分の大学に戻ったときに乗数効果を通じてその数を増殖するように，有望で成熟した社会科学者の相互教育である。しかしオリジナルなプランはまったくポールのものであったので，組織的でない私にとってよりも彼にとってはるかに多くの意味を持ったが故に，彼の力点と彼の前提は最終文書まで残った。

私が思うには，ポールは最適な序列的フォーマットの前提を物理科学，生物科学におけるヨーロッパのリサーチ実験室という馴染みの原型よりも，ウィーン大学の心理学施設で彼自

---

[55] 当時気づかれており，回顧でますます認識されたとおり，G.I. Bill は高等教育へのアクセスの機会構造を根底から変えた。他の大学のように，我々の院生の比率の増加はまずカレッジに，それから大学院に通学する彼らの家族においてであった。G.I. Bill のジェネリックな意義に関しては，Harold M. Hyman 1986：69ff 参照。

[56] パロキアルであるがめぼしい例。1940年代後半まで，コロンビア大学の社会学科の教員10人前後は（連続するコホートを合計すると）80〜100人の院生の教育指導に従事していた。ポールは大学院の範囲を超える上級トレーニングのためのひとつのプラン（社会科学のための大学院およびポストドクのためのプロフェッショナル・スクール）を考案した。

身の好みと体験から引き出している[57]。十分に物語るように，ポールは彼の師心理学者カール・ビューラーを施設の長として描写するだろう（Lazarsfeld 1975 : 46）。彼の友人はポールが持つ終生変わらない序列感に十分気づいていた。Helen M. Lynd は彼女の夫 Robert S. Lynd とポールの複雑な関係を思い出したときに，「ポールは強い序列意識を持っていた。彼は初めての人物と会うときに，彼が最初に思うことは「彼は私より上か」,「彼より私が上か」であった，と語っていた[58]。

前記のスケッチの中で，アーノルド・タックレイは上級トレーニングのための拡張されたプランが様々の予想外のルートを通じて，新たに活動し始めたフォード財団の注目を惹き，上級研究センターにこぎ着けたことを思い返している（Thackray 1984 : 67）。さらに込み入った詳細は，本質的に正しい考察は我々をここに留めておかないことをはっきりさせる。もっと肝心なのは，シニアの学者のコア・スタッフと学生，インターン，エクスターンの役割のポスドク生のフローをもつある種のプロフェッショナル・スクールというポールのイメージから，センターは遠くかけ離れたことである。ポールは序列組織の施設という彼のコンセプトに対する私の反対に不快感をあらわにし，センターが世代の異なる学問の異なる階層的でない交流するフェローのカンパニーとなるべきという企画委員会の全員一致の決定に私が賛成したことに激しい怒りを示した。抗議の後で彼はシニア・フェローの継続スタッフに関して敗北を認めた後で，ジュニア・フェローに彼らの上級の知識を伝えるために客員シニア・フェローを設ける構造変革を引き起こすことができるだろうと考えて，第一コホート・フェローズの入れ替えに同意した。彼の仲間のフェロー達や大学の理事達の間に，序列のこの修正されたアイデアに対する何ら肯定的な反応を見いだせず，年次休暇の滞在から戻ってきたポールは，センターは平たく言えば私のアイデアのまやかしものだと自分に言い聞かせた[59]。数年たっても，彼にとっては，センターが社会科学のひとつの中心的施設として遠く，広く歓迎されることは大事でないことはなかった。

ついでに述べるなら，ポールは 1950 年の提案を 1972 年の論文集に再録するまで公表することはなかった[60]。彼は再録にあたって，目立つ紹介的注釈を付している。

ロバート・マートンとの共著で書かれた 1950 年に執筆されたこの覚え書きは複写の形

---

[57] 彼はそこで社会心理学と統計学の講義の助手として経歴を開始している。

[58] Helen M. Lynd から Dr. Ann Pasanella への手紙（日付 1977 クリスマス）。

[59] 第一コホートにいたハーバート・サイモンはシニアフェロー，ジュニアフェローの計画の拒絶はポール・ラザースフェルドの夢を壊した，我々は終生の友人であったものの，彼は決して破壊に私が荷担したことを許さなかったと回想している。Herbert Simon 1991 *Models of My Life.* New York : Basic Books. p. 171.

[60] Lazarsfeld 1972 : 361-391.「社会リサーチにおけるトレーニングのためのプロフェッショナル・スクール」

で広く出回った。コロンビア大学の教授会はその事柄を議論したが，プランを実行に移すために入手できる基金がひとつもなかった。*その覚え書きはその後フォード財団に申請され，委員会が任命された。議論の過程で最終的にCASBSの創設に導いた大体の考えが検討された。その構造はこの覚え書きに提案されたものとは全く異なった形のものである*（Lazarsfeld 1972：361）。

ここにイタリック体になった文章のサブテキストは，彼が「私のアイデアのまやかしもの」と彼が描写したものが，CASBSの中に制度化されたほぼ20年のちにも依然として怒りと不満が残っていたこと明らかに表している。我々はセンターの序列構造の性質に関して意見が一致していないことに最終的に同意したが，我々の間の緊張はそこで終焉した。彼が自分の中心的アイデア「上級トレーニングのための一種のプロフェッショナル・スクール」から我慢ならないほど逸脱したものとして感じたものが，国内と海外の人文学，社会科学のいずれかに実質的に張り合う先端科学のためのメジャーな新しい制度形態に進化してきたことを私は彼に納得させられなかった。ジャーナリステックに「シンクタンク」と呼称されるようになったものは，明らかにプロフェッショナル・スクールではなかった。

3.3　社会的に評判を落とす理由を使う達人

私はポールのde-rationalizationと描写されるものへの永続的な（他人には喜ばれない）嗜好を何とか中和しようとしたができなかった。ウィーン人であることに由来するタームrationalizationがある行為，信念をおそらく，いや実際に社会的に評判を高める理由に帰属させることを指すなら，de-rationalizationはある行為，信念をおそらく，いや実際に社会的に評判を下げる理由に帰属させることを指す。いや卑俗な言い方では，rationalizationが「悪しき」行動に「良き」理由をつけることを指すとすれば，de-rationalizationは「良き」行動に「悪しき」理由をつけることを指す。ポールがde-rationalizationの技法を作り出さなかったとしても，彼は確かにその達人であった。

その疑わしい技法をポールが演じた主要な例が容易に思い浮かぶ。私は長年にわたる我々の数え切れない雑談についての彼のde-rationalizingな描写を真っ先に思い浮かべる。これらは，大体のところアイデアの交換と論争，学科での我々の合同セミナー，院生やアシスタントの賞賛，研究所のためのリサーチプラン，研究所のための大学の乏しい財政支援を増やすためのポールの企画に割かれた。しかしながら，彼のde-rationalizingなモードでは，彼は上記のワークセッションを他者にはたくらみのセッションとして描いた。我々のコラボレーションに関して彼の回顧において，次のように書いている。

> 私は当日の出来事，翌日の計画をマートンと議論したいと思ったが，5 時過ぎになってようやくその時間を持った。そこで私は特別の戦略を発明した。ここでポールは巧みなマキアベリアンという時折みせる自画像を楽しんでいる。4：45 頃に私は彼が興味を抱きそうな問題を持って彼のオフィスを訪れる。延々と続く議論は次第に長くなって長いときには 8 時まで続くことになった（Lazarsfeld 1975：37）。

これはポールの単なる言葉の失策ではなかったし，度肝を抜こうとしているのでもなかった。彼の de-rationalizing な耳は scheming, plotting 陰謀というワードの不快な含意に耳を貸そうとしないだろうし，アウトサイダーとしての自分を de-rationalizing することは上記の自分を非難する定式化のしばしば招く厄介な帰結に配慮していないだろう。

またポールは研究所が商業的クライアントに応用調査をオーバーチャージしてきたことを時々公言した。「オーバーチャージ」というやや遠回しのタームは寡占，独占という利潤最大化価格政策を指す経済学のタームでは決してなく，かわりに不道徳の意味合いを持つ不快な民衆タームである。その de-rationalizing なタームを使用する際に，ポールは実は研究所がアカデミックな目的に奉仕するという応用研究の企画部分とアカデミックな研究の費用と研究所アシスタントの訓練費用のかなりの部分を商業予算（commercial budgets）に負わせていることに実は言及しているのである。しかしながら，「オーバーチャージ」という遠回しのタームを耳にした者で，社会学者 Buxton/Turner の周知のやり方で解釈する者はほとんどいない。

> ラザースフェルドのモデルはひとつのサーベイプロジェクトを二通りに使用するものであった。リサーチの代金を支払う企業や機関のために固有の記録を生産することと，同じ材料を使用してアカデミックな研究を執筆すること。その際に，企業，機関の支払うオーバーチャージがアカデミックな目的のサーベイを可能にしたことを付記する（Buxton/Turner 1992：382：n9）。

ポールが必要に駆られて彼の財政が貧弱な研究所に導入した「オーバーチャージ」という不道徳に思える慣行は，大学の研究所に対する乏しい資金給付とまだ到来が始まっていなかった政府や財団の支援の彼による機能的代用であった。しかし de-rationalizing な言葉によって鼓舞されて，研究所の金庫に個人的コンサルタント料を絶え間なく注ぎ込んでいたのに，ポール自身が「オーバーチャージ」から金銭的利益を得ているという噂が飛び交った。そこではポールは大学が財政を賄う社会調査とトレーニングの施設でなく，大学に拠点を置

く社会調査とトレーニングの施設というパタンを実質的に発明し，この制度的達成を「オーバーチャージ」という不快な慣行に基づくものとして何とか描写しようとしたのであった[61]。

ポールを de-rationalization に戻らせた別な人格問題が存在した。彼は自分の寛大な行為を広く承認させたことによって困らされた。彼は他者が愛他心と見なすものに捕らえられるとそれを rational self-interest にすぐに帰属させた。研究所スタッフが以前に彼とつながりのあった手頃な数の有能だが亡命を求めている学者を含めることが明白になったとき，自分が善をなしていることを彼は即座に否定し，自分は依怙贔屓をしたと告白した。人びとが一般的に依怙贔屓を係累と友人の不当な優遇を行うことという見解を抱くと，彼は説明しようとした。「見なさい，そのナンセンス者よ。依怙贔屓はわかりやすいものだ。私は係累，友人，友人の配偶者を最善の理由のために雇っている。私は見ず知らずの者に支払わねばならない金額の半額で彼らを雇っているのだ。彼らから二倍の仕事をしてもらっているのだ」。かくして，ポールは自己提示を de-rationalizing している。研究所で亡命社会科学者の一群にリサーチのための臨時の機会を提供した持続的試みは，彼らの不安定な状況を利用する彼の搾取する自己の事例に他ならなかった。彼らの多くは係累 —— 彼のかつての妻 Marie Jahoda, Herta Herzog を見よ —— あるいはウィーン人の仲間とその係累 —— 研究所で働いた Hans Zeisel とその妹 Ilse Zeisel を見よ —— あるいはウィーンからの亡命科学者の係累 —— 有名なウィーンサークルの創設者で経済史家で独学の社会学者 Otto Neurath，息子である若き Paul Neurath を見よ —— この実践は依怙贔屓として描写されうる。研究所での仕事のおかげで Hans Zeisel がシカゴ大学の法社会学教授になり，フランクフルト学派の一員であった Leo Lowental が紆余曲折の末バークレー校社会学科にアカデミックなポストを得たことを彼は目にした。要するにそして後世の分析概念で見れば，ポールは彼の社会的ネットワークの移住者に社会関係資本，つまりさもなければ容易に手に入らない機会構造へのアクセスを提供することに甲斐甲斐しかった。しかしこれらの行為を愛他的行為，あるいはウェーバーの概念，価値合理性の例とみなすよりも，ポールは善行をしていることが判明することに対する強い当惑をカムフラージュするために，ウェーバーの目的合理性という自己に利する用具主義者の流儀に従事するものとして自己を提示する de-rationalizing なスタイルを選んだ。

コロンビア大学管理当局のメンバーがこの大体において自己維持的社会学実験室にあまり

---

[61] 要するに，Henry Etzkowitz の用語でいう，実業的科学 entrepreneurial science（いわば大学実験室と生物工学企業の合弁）として登場したものの昔日の機能的等価物である。
Henry Etzkowitz 1993 “Redesigning ‘Solomon’s House’ : The University, and the Intternationalization of Science and Business.” Elizabeth Crawford/Terry Shinn/Sverker Sorin（eds.）書名不記載 Dordrecht : Kluwer. pp. 263-288.

理解がなかったために，かれらがしばしば研究所の位置と活動に疑義を呈した時に，私は全く賞賛すべき行動にあるいは組織ルールを創造的に曲げる行動に，社会的に疑わしい理由を与える実践をポールに負わせようとした。疑いもなく悩ましい仕方で，これは彼自身の卑下する自己のためだけでなく，研究所のため，果ては社会学科のためでもあったことを彼に思い出させようとした。それに対して彼は典型的には，それは細心の注意を払った実践であると応じた。彼の行為彼の傷付きやすい自我をステグマタイズすることは，他者がそれをするのを予防した。「私がそれを最初に言ったら，彼らはそれについて何にもできなくなる」。「陰謀スキーム」「オーバーチャージ」「依怙贔屓」のような自己卑下的タームは計算された社会防衛メカニズムの営みに他ならなかったと述べながら，それは彼の考えるマキアベリ的フレーズあったろう。ひとりの多元的アウトサイダーとして，「外国人，移住者，ユダヤ人」という彼のマージナルな属性と信じる豊富な理由を持つものに注意を向けさせることによって，彼はこの種の先制戦略を用いた[62]。

> あなたが長年知っているように，私は私のアクセントに関して公衆の前で即座に使えるジョークを収集してきた。というのは私はコロンビア大学の何らかの公式の代表として私が語る時，人びとがショックを受けることを知っているから。最初の 1 秒は私がメイフラワーかそれに近いものでは私が出会わなかったジョークをするだろう[63]。

ポールは自分の頻繁の de-rationalizing moments において，計算高い行為であることが分かり切っているのに，自分が計算高い操縦者では全くないと認識していた。彼がコロンビア大学に来る数年前にロバート・リンド宛に書いた手紙に関して彼のメモワールの中で告白している。「今日 4 頁シングルスペースの手紙を読んでいて，少なくとも私が自分に帰属させたマキアベリズムによって楽しませてもらった（Lazarsfeld *Memoir* op.cit.307.）」。だが，マキアベリについていわれてきていることは，ポールについてもほとんど当てはまる。

> 彼は良き品性を持ちながら，良くないことを行う。彼は自分の対等者にショックを与え

[62]（大いに成功を収めたわけではないが，少なくとも中クラスに属したであろう）ウィーンの法律家の息子，ポールが自分を永遠に抜けられないアウトサイダーと定義し，彼は私を永遠に抜けられないインサイダーと定義しているのは私には皮肉に思える。35 年ほど前『ニューヨーカー』プロファイルが述べたように，私は労働者階級で，東ヨーロッパ出身のユダヤ人移民の子として南フィラデルフィアのスラムに生まれたのに。ポールは我々のコラボレーションに関する彼自身の回顧談を我々二人に対するインタビューに部分的に依拠したよく記録されたドキュメントを引くことによって始めている。Morton Hunt 1961 “Profile : How Does It Come To Be So ?” *The New Yorker,* 1 月 28 日，1961 年 pp. 39-63.

[63] David Morrison 1988 “The Transference of Experience and the Impact of Idea : Paul Lazarsfeld and Mass Communication Research.” *Communication* 10 : 192

るために，自分が実際にそうであるよりももっと悪いと思われたがる。［中略］彼は自分の場所がかなりいいものを持っているのに，悪い場所に所属しているとみなされることを好んだ（Ridolfi 1963［1954］12-13.）。

彼が研究所を単なる調査組織よりも独自の研究共同体として維持するのに重要と考えたポールのマキアベリ的行為，忠誠の持続的強調，de-rationalization の性向は厄介な個人的帰結と組織的帰結を組織が共有することをもたらした。ポールとの生活は常に興味深くめったに退屈することはなかった。

デーヴィット・シルズが国立科学アカデミーのポールに関するメモワールでそれを要約したように，ラザースフェルドを大学，彼の同僚，彼の教え子，彼のスポンサーとの数多くのトラブルから免れさせるために外交のスキルが呼び出された（Sills 1987 op.cit 271.）。当時もそれから遠く振り返る今でも，それはすべて少しの十分な代価であるように思われる。我々の35年にわたるコラボレーションの間に発生した対人的緊張の源泉で次の3つとほぼ同程度の強さのものは他にはない。研究所でジョイント・ワークに向かう前の早朝時間，私の好みの理論的ワークを制限しなければならなかった永続的感覚。社会調査のプロフェッショナル・スクールのためのグランドプランをねじ曲げた施設の最初の20年間に積極的役割を果たすことによって私が彼を失敗に追いやったというポールの永続的感覚。彼の頻発する困難がここで de-rationalization として描写された形式，彼の社会的交流の個人的スタイルに少なからざる部分由来するという我々が否が応でも共有する感覚。

まだ，まだシビアで決して完全に解決されることがなかった緊張も我々の友好関係を壊すことはできなかった。

4.　究極的産物：教え子達

この長い回顧は，ポールと私のコラボレーションのもっとも甚大な産物は活字になった少数の共著を超えていること，我々の互いに対する認知的影響を超えていることをますます納得させることになった。むしろそれは全く別の種類のものである。一世紀以上前にフランスの鉱山技師で独学の社会学者フレデリック・ル・プレイによって巧みに要約されている。私のものに由来する最も重要なことは坑夫である。全く同じ精神で，コロンビア大学の社会学に由来する最も重要なことは弟子達であった。私が述べてきたように，学生の連続的な大きなコホートは第二次世界大戦の終結とそれに続く G.I.Bill（復員兵援護法）のおかげで，1940年代，1950年代のコロンビア社会学の景観を輝かしいものにした。彼らは1960年代，

1970年代の新しい才能の連続的フローを我々にもたらした知的な興奮を生み出すのに多大な貢献をした。学生自身がコロンビア大学を選んだことは，計画されなかった社会的ネットワークを通じて働きながら，社会的・認知的ミクロ環境と第一級の学生下位文化をを形成するのを助けた。ジンメルがずっと昔に語ったように，社会的インタラクションは，その参加者はランク，権力，権威の面で決して等しくないが何らかの程度の相互の影響を伴う。これはコロンビア大学でも当てはまった。才能に富む元気に満ちた院生は彼らの各々にそして彼らの教師にも記憶を呼び覚まさせる環境（冷静な観察者はアイデアのバーチャルな騒乱と呼ぶ）を提供した。各コホートは彼らの仲間の学生と教師の双方によって対等な者の間でまず承認された，特に思い出に残る学生の伴走者を持った。学生のこの思い出させる役割に照射するのは，そのミクロな環境が我々教師がそこにいなかったなら同じではなかったろうと語るほど，自覚的に自己否定的で歴史的に無意味だというのではない。

我々のコラボレーションに集中するポール自身の回顧と同様，これは社会学科，応用社会調査研究所の他のメンバーと我々のコラボレーションのを再追跡する努力を一切払わないことを断っておく。しかしながら，年代マップは1941-1970年のある時点の社会学科のシニア・フェローを構成する集まりのいくつかの考えを伝える。

4.1　交流，役割モデル，アンビバレンス

長年にわたる数え切れない会話の中で，ポールと私は学生との交流とコラボレーションが彼らと我々との交流に明らかに影響してきたその方法に注目してきた。そしてまた，かつての教え子で卓越した社会学者になったものによる省察に富んだ自伝的考察は，「我々自身の」補完的なコラボレーションという我々自身のモードが時として彼らの社会学観の進化的影響を与えていることに気づかせてくれる。

> 私が大学院を離れたとき私が社会学に関して抱いていたビジョン。社会学は分水嶺を構成した二つの次元に分裂すべきだ。社会学は分析単位として個人よりもむしろ社会システム（小さなシステムであろうと大きなシステムであろうと）を持つべきだ。しかし社会学は研究者のバイアスに自らを委ね，レプリカに荷担できない，説明への注目，因果性への注目を欠く系統的でない技法の背後に残る計量的方法を使用すべきである。私や当時のコロンビア大学の他の学生達はなぜこのビジョンを持ったのか。それは同じ学科にいるだけでなく，共同したり一緒に教えたロバート・マートンとポール・ラザースフェルドのユニークな結びつきがあったからと私は思っている。ラザースフェルドは新しい計量方法によって提供された機会を我々に示した。マートンは我々の目を社会学に

とって中心的な理論的問題に釘付けにした。[そのコラボレーションの意味は他のかつての弟子によって活字で回顧的に様々に表現されている[64]]。彼らのうちの二人がコラボレートできたならきっと我々はこの組み合わせを前進させ，社会学を変貌させることができたことであろう（Coleman 1996 : 345, 1994 : 30-31.）。

コールマンが実際にポールと私のコラボレーションを「対の役割モデル paired role model」らしきものとして体験したのは，おそらくシンボル的に適切であろう。というのは，オクスフォード英語辞書が我々に教えるところでは，役割モデルの用語と概念はコロンビア大学の社会学の伝統に範を取っているから。

しかし学界，学者に適用されたアンビバレンスの社会学理論から我々が予想するように，役割モデルはしばしば混合した感情の対象となる。これは疑いもなくかなりの数の教え子達に当てはまる。そのことはコールマンの別の回顧で把握されている。私が指摘してきたように，コールマンは，ラザースフェルドが重要とみなした広汎な問題に関するポール自身の不屈の取組みとこれらの問題の下位集合に関して彼が様々に他者達を巻き込んだことにアンビバレントな感情を表明している。

これは彼の個人的なスタイルであった。彼は自分が尊敬する聡明な人物（同僚であれ，

---

[64] コールマンの他のそのような回顧に関して次を参照。
"Paul F. Lazarsfeld : The Substance and Style of His Work." in R.K. Merton/Matilda White Riley（eds.）1980 *Sociological Traditions from Generation to Generation.* pp. 153-174.
"Paul F. Lazarsfeld's Work in Survey Research and Mathematical Sociology." in Lazarsfeld, 1972 *Qualitative Analysis.* pp. 395-409.
"Robert K. Merton as Teacher" in John Clark et al. 1990 *Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* pp. 25-32.
Peter Blau, Seymour Martin Lipset, Philip E. Hammond, Charles Wright と並んで，コールマンはコロンビア大学社会学のミクロな環境についての言葉の肖像を彩った者のひとりに属する。Philip E. Hammond（ed.）1964 *Sociologists at Work.*
また彼は Dennis Wrong, Nathan Glaser, Alice S. Rossi, Cynthia Fuchs Epstein とともに自伝的考察を提示している。"Columbia at 1950s" in Bennet M. Berger（ed.）1990 *Authors of Their Own Lices.*
コールマン以外では，Matilda White Riley（ed.）1988 *Sociological Lives* 所収 Alice S. Rossi, Lewis A. Coser の論考，Hannan C. Selvin 1975 "On Formalizing Theory." in Lewis Coser（ed.）*The Idea of Social Structure*. pp. 339-354. 同じ書物所収 Charles R. Wright 1975 "Social Structure and Mass Communications Behavior" の冒頭部分 pp. 379-380.
?（ed.）1983 *Realizing Social Science Knowledge.* 所 収 Paul Neurath"Paul F. Lazarsfeld and the Institutionalization of Empirical Social Research." pp. 13-26.
Ann K. Pasanella 1994 *The Mind Traveller : A Guide to Paul F. Lazarsfeld's Communication Research Papers in the Columbia University Library.*
David L. Sills 1987 "Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976 : A Biographical Memoir." pp. 251-282. in *National Academy of Sciences. Biographical Memoirs.*
David L. Sills 1996 "Stanton, Lazarsfeld, and Merton-Pionner in Communication Research." in Everette E. Dennis/Ellen Wartella（eds.）*American Communication Resaerch-The Rememberd History.* pp. 105-116.
David L. Sills 1968 "Paul F. Lazarsfeld"in David L. Sills（ed.）International Encyclopedia of the Social Sciences Vol. 18

教え子であれ）が近くにいることに，そして自分が重要とみなした問題に取り組んでいることに堪えられなかった。彼は自分自身の時間，おべっか，注目を使い，お金を使い，ニューハンプシャー州ハノーバーでの夏を使った。彼はこれをもたらすために彼の利用できるあらゆる誘因を使った。彼の周りの一部のものはこれを嫌ったし，他の者はこれを利用した。彼らはポールの術中にはまったと感じたが，ポールのリーチから離れた途端，喪失感感に苛まれたり，途方に暮れた（Coleman 1988：167-168）。

コールマンが気づいたように，ポール自身新たに同定した問題を解くことにいつ尽きるとも知れない努力を払うときには学生のようであった。ポールは彼らから学ぶことができると思ったときにはいつでも，彼の教え子の誰にでも（Lee Wiggins, Allen Barton, Elihu Katz, Hanan Selvin, William McPhee）執拗に質問した。コールマンは続けて彼や仲間の教え子達が体験した不満を描写している。「ポールは自分以外の他者が重要とみなした問題を教え子や同僚が解くのを見ることに満足せず，自分が重要とみなした問題が解かれ，それも彼にわかるような仕方で解かれて初めて満足した（Coleman 1988：170）」。

別の回顧談で，コールマンは私に関しても明確なアンビバレントな感情を露わにした。理論的な仕事が系統的な経験的リサーチとどのように交流するかを明らかにすることによって，彼や彼の仲間の教え子のために私が社会学を「天職（calling）」に変換してくれたと最大級の賛辞を送っている。しかしまたも，真にアンビバレントなスタイルで，私が彼らの渾身の努力を木っ端みじんに批判し，彼らが私の全く不可能な要求に応えられなかったという感覚を持たせ絶望の淵に立たせたと，彼らの体験を語る（Coleman 1990a：32）。

ポールと私の全く異なったティーチングスタイルは多様な学習好みを持つ教え子達を戸惑わせたことだろう。物理科学，生物科学の実験室の長や研究を組織する一般の長のあいだによく見かける実践のように，ポールは彼らに固有の能力と関心に応じて問題を同定し教え子に割り当てることを好み，リサーチプロジェクトを組織しながら彼らを指導した。上記のすべては彼の開発したリサーチ・プログラムに従っている。彼にとっては，ティーチングの主要モードは一義的には進行中のプロジェクトを進める中でのワークセッションであり，手を取りながら指導するセミナーはその次であった。彼は講義をすることにはハッピーでなかったので，その準備にほとんど時間を割かなかった。対照的に，私は教え子とワークする基本的手段としてのリサーチ・プロジェクトに熱心ではなかった。私のティーチングの好みの順位はまず講義で，次にセミナーで，とりわけ彼らの草稿を彼らとともにワークすることであった。内容と形式のエディテングは一部の院生には明らかに不満を抱かせたが他の院生には好まれたやり方であった。

コラボレーションの年月に姿をとって現れた我々の他の違いに関しては，ポールと私は我々が異なった教え方をそれぞれが好むことを確認しようと努めた。これを基本的には我々は不定期に開かれた合同セミナーで確認した。そのセミナーは「社会学理論とリサーチ方法の関係における精選された問題」と題した。その内容的よりは形式的なタイトルは，我々が相手方が目下行っているリサーチを独自の視点から批判的に考察し，時に拡張するための豊かな余地を与えた。この合同の「口頭発表」は一度だけ活字に載る術を見いだしたことがあったが，それは教え子達ののちの回顧から判断すると，一部の院生にとって，別々の講義，学生リサーチの個別指導と並んで，その意図した機能を果たしていた（Lazarsfeld/ Merton 1954：18-66.）。リプセットのコロンビア大学の学科の歴史についての初期の断章は「ラザースフェルドとマートンは彼らの異なる力点（一方は経験的リサーチの方向，他方はシステマテックな社会学理論の開発の方向）は実際には沢山の方法論と理論の合意を隠していたことを観察している。つまり両者はシステマテックな社会学理論に由来する仮説をテストし，増やすことに使用しうるツールの開発に関心があった（Lipset 1955：297-298.）」。ブラウもまた回想している。「当時のコロンビア大学の雰囲気は我々院生の大半が共有していた思いこみ（社会理論家というものはシステマテックな経験的考察に関心がない）を破壊する傾向があった。理論とリサーチを統合したいという私の新しい関心は，私をラザースフェルドが提供する講義とリサーチ方法に関するセミナーのすべてを受講させ，官僚制についての経験的考察を行う決心するように動機づけた（Blau 1964：17-18.）」。

4.2　才能あふれた教え子のフロー

様々な交流モードにも拘わらず，教え子達はポールと私の長年の会話が彼らを中心にしていたことが大きな範囲を占めていたことを知るよしもない。教え子の資質，関心，可能性を診断しようとして我々は彼らのかなりの数が社会学のスカラーシップに消えない痕跡を残したことをほとんど疑わなかった。もちろん彼らの多くはそれを残した。

これが紙面が限られたペーパーでなく詳細なモノグラフであったなら，私はこの30年間の卒業生の完全な名簿をリストすることによって，才能あふれた教え子の連続的流れの感覚を伝えることができよう。代わりにせいぜい認知的貢献の不完全な指標を提供するpeer esteemを検証する二つの非常に制約のあるリストに限定する。ひとつはアメリカ社会学会によって提供されたリスト（会長に選出された者のリスト）である。彼らの最初の者が選出された1973年から現在（1996）[65]まで7名で，それは23名の約3分1にあたる（Peter Blau,

[65] 本稿は1941年に始まるコラボレーションに焦点を置き，50歳以前にASAの会長に選出された者はほとんどいないので，最初のコロンビア大学卒業生がその象徴的ポストに選出されたこの年から数

James S. Coleman, Lewis A. Coser, Mirra Komarovsky, Seymour Martin Lipset, Peter H. Rossi, Alice S. Rossi)。これは peer esteem をかなりよく表すものである。

記念論文集として知られる名誉な書物は卒業生に peer が与えた承認のもう一つの指標である。記念論文集は比較的まれにかつての師と年配の peer に敬意を込めて，かつての教え子と成熟した peer によって捧げられることがある。だが次第に生き延びた教師がかつての教え子に敬意を表して寄稿することが増えている。私は Peter M. Blau, Lewis A. Coser, Rose Laub Coser, Seymour Martin Lipset, Franco Ferrarotti の記念論文集に寄稿し，James S. Coleman, Alvin W. Gouldner, Louis Schneider の追悼論文集に寄稿している。最近数十年に到来し続けることになる贈られる教え子が膨大になることを鑑みれば，今後の記念論文集は私はあの世にいることだろう。

しかしもちろん上記の二つの正確な指標はポールと私がコロンビア大学で教えたほぼ 3 分の 1 世紀の間に通過した教え子のなかの前もって定められた有名人の豊富さを示す端緒に過ぎない。詳細な研究はチャールズ・クローザーズによって集められたデータベースの分析を待たねばならない。しかしながら，彼の試験的データ分析は人が想像したとおり，我々の長期の滞在がこの間に完成されたほぼ 300 本の博士論文のかなりの比率を合同か個別で指導したことを検証している[66]。

これらの博士論文に立ち戻ると，私はどうしてもバーナード・ベレルソンによって実施された学生とアメリカ博士論文スポンサーの関係の研究（それは応用社会調査研究所の所長となる直前のもの）を思い出さないわけにはいかない[67]。大学院教員の全国サンプルと最近の博士号取得者を引きながら，ベレルソンは a collective Rashomon effect 集団的羅生門効果に類似したものを発見した。「あなたの経験では，大半の博士論文のトピックは実際はどのようにして選択されているのか」の質問の回答。約 2,300 名の新しい Ph.D のなかで，約 2,000 名の教員のたった 8% と対照的に，46% 強は，院生がトピックを選択し，Ph.D の 39% と教員の 68% は院生とスポンサーが合同でトピックを選択し，スポンサーがトピックを選択したのは，Ph.D の 21%，教員の 15% であった。博士論文のトピック選択の社会的知覚のはっきりとした違いと対照的に，教員と近年の Ph.D は博士論文の実際の作業におけるスポンサーの役割に関する質問への回答で，「密接で継続的な監督指導」と答えた者が Ph.D の 32%，教員の 27%，「監督指導はほどほどで，ねらいは十分」と答えた者が Ph.D の 50%，教員の 58%，「監督指導はほとんどないか不十分」と答えた者が Ph.D の 5%，教員の 13% であった

え始めることにする。

[66] Charles Crothers *The Columbia Sociological Tradition*, Unpublished data-set.

[67] Bermard Berelson 1960 *Graduate Education in the United States*.
彼が研究所所長であったのは 1961-62 の 2 年間であった。

(Berelson 1960 : 178-179.)。

私が今ベレルソンタイプのサーベイに含まれるなら，私は幾分自信を持って，我々の全く共通点のないスタイルと合致して，ポールは彼がスポンサーする博士論文の大半に主題と問題を割り当て，私がスポンサーする博士論文のトピックと問題はスポンサーと院生の合同で選択するか院生自身に選択させると回答するだろう。それから徹底的に自分に独りよがりなスタイルで，選択的な記憶の通常の気まぐれに従って，私は主張するだろう。我々は二人とも我々が別々に監督指導した，ならびに合同で監督指導した博士論文の大半に細密で密接なあるいは少なくとも十分な指導を与えたと。疑いもなく時折過剰な指導をしたと。しかしベレルソンの研究が私に思い出させるように，すべてはかつての教え子自身によって独自に確認されることを必要とする主張に過ぎないことを。

いずれにしても，ポールと私は院生が中心であったことに疑いを持たない。彼らの後年において社会学という学問自体を前進させたことを指摘するのは我々にとって幸せなことである。そのすべては我々に 30 年の感謝で古い手をさしのべてくれた。隣接社会科学のもう一つの古い手はそれを次のように語っている。「アカデミックな生活における最大の喜びのひとつは, 自分より年下の大物が成長し我々の仲間に進化するのを見ることである。それから，何より良いのは，あなたが自身の転換期にしえたように，あなたを飛び越えていく掌中の仲間をまれに見ることである」。 以前にも何度か語ったかも知れないが，私のそんなに親しくはない同僚である Paul A. Samuelson は我々以外の者達のためにもう一度語っている。確かにポールと私は，我々二人の間のおよそあり得ないと思われたコラボレーションが教え子と同僚とのコラボレーションの広がりに発展し始めたのを見て無上の喜びを感じている。

5.　結び

ポールと私の間の感情的，認知的緊張についての上記の再収集の中で私は多くのことを行ってきた。これらは他の豊富な公開記録の一部でなかっただけに途方もなくそうであった。その力点がミスリードにおかれないなら，私はもう一度述べなければならない。対人危機として我々が体験したことはすぐに適応的和解が後続した。私はひとつのエピソードを思い出す。ポールがレイモン・ブードンと共著の一冊，『社会科学の語彙（仏版)』[68] の初版の一冊を私に献本した時にリルケのメッセージを添え書きしていた[69]。ポールの判読しにくいペン

[68] Paul F. Lazarsfeld/Raymond Boudon（eds.）1966 *Le Vocabulaire des Sciences Sociales : Concepts et Indics.* Paris : Mouton.

[69] Rilke *Die Sonette an Orpheus.*
Hans Zeisel 1979 “The Vienna Years” p. 15 でリルケはポールと我々のお気に入りの詩であると語って

字よりむしろすぐに判読できるタイプ字で示すと

私の知らないあなたに，あなたの知らない私から捧げる
ポールからボブへ

いくらか躊躇してから，私は長年にわたる我々のコラボレーションの基底にある友好関係を伝えるポールによるリルケの引用に私の即座の応答をしたためた。もちろんオリジナルは手書きであったが，判読のためにタイプ字で記す。

親愛なる　ポール

ちょうど届いたばかりの『社会調査の言語の仏版』は仏版の表現をはるかにしのぐものである。それは実際は新しい書物だ。新しい論文のいくつか（Maucorps 論文と Moscovici 論文）は想像力に富み，説得力がある。素人の本制作者としてわたしはこの書物の美しさを賞賛できる。3 巻が出版されるとその内容形式の面であなたの永遠の記憶に残るものとなろう。あなたは自分が幸せでない振りをしてはいけない。私がドイツ語でリルケを味わうことができず貧弱な英訳に頼らざるを得ないものの，献辞は多くを語っているので，私も献辞を付け加えることができる。

それまでお互いを全く知らなかったのに，今ではお互いを頼りにしている

ボブ

ポールの献辞を受け取った時に，私は詩人ハンス・エゴン・ホルシューセンが『オルフェスへの恋詩（ソネット）』の一節を読んだ次の文章が心に浮かんだ。「かくしてリルケは我々の状況を描写した。それは秘密のコミュニケーションモードがコミュニオンの源泉となる状況である。リルケが言おうとしたように，関係が形成されるのはそのような秘密のコミュニケーションにおいてである」[70]。

文献一覧

Barton, Allen H. 1982　“Paul F. Lazarsfeld and the Invention of the University Institute for Applied

いる。

[70] Hans Egon Holthusen 1952 *Rainer Maria Rilke : A Study of His Later Poetry.* Cambridge : Bowes & Bowes. p. 8

Social Research." in B. Holzner/ J. Nehnevajsa（eds.）*Organizing for Social Research.* Cambridge, M : Schenkman pp. 17-83.

Berelson, Bermard 1960 *Graduate Education in the United States.* New York : McGraw-Hill.

Berlin, Isaiah 1953 *The Hedgehog and the Fox : An essay on Tolstoy's view of history*. London

Blau, Peter M. 1964 "The Research Process in the Study of *The Dynamics of Bureaucracy*." in P.E. Hammond（ed.）*Sociologists at Work* : New York : Basic Books. pp. 6-49.

Boudon, Raymond 1970 "A propos d'un livre immaginaire : Preface to Paul F.Lazarsfeld, *Philosophie des Sciences Sociales*" Paris : Gallimard.

――――（ed.）1993 *Paul F. Lazarsfeld on Social Research and its Language.* Chicago : Univ. of Chicago Press.

Buxton, William/StephenTurner 1992 "From Education to Expertise : Sociology as a Profession." in T.C. Halliday/M. Janowitz（eds.）*Sociology and Its Publics.* Chicago : Univ. of Chicago Press. pp. 373-403.

Carnap, Rudolf 1937 "Logic" in R. Carnap *Factors Determining Human Behavior* Factors Determining Human Behavior pp. 107-118. Cambridge : Harvard Univ. Press.

―――― 1936, 1937 "Testability and Meaning" *Philosophy of Science*. 3 : 420-471, 4 : 2-40.

Coleman, James S. 1972 "Paul F. Lazarsfeld's Work in Survey Research and Mathematical Sociology." in Lazarsfeld, *Qualitative Analysis.* Boston : Allyn & Bacon. pp. 395-409.

―――― 1980 "Paul F.Lazarsfeld : The Substance and Style of His Work." in Robert K. Merton/ Matilda White Riley（eds.）*Sociological Traditions from Generation to Generation : Glimpse of the American Experience.* Norwood, N.J. : Ablex Publishing Corpe. pp. 153-174.

―――― 1990a "Robert K. Merton as Teacher" in John Clark et al. *Robert K. Merton : Consensus and Controversy.* London : Farmer Press. pp. 25-32.

―――― 1990b "Columbia at 50's" in B.M. Berger（ed.）*Authors of Their Own Lives.* Berkley : Univ. of California Press. pp. 75-103.

―――― 1994 "A Vision for Sociology" *Society* 32 : 29-34.reprinted in Jon Clark（ed.）1996 *James Coleman*. London : Falmer Press. pp. 343-349.

Coser, Lewis A./Robert Nisbet 1975 "Merton and the Contemporary Mind." in L.A. Coser（ed.）*The Idea of Social Structure : Paper in Honor of Robert K. Merton.* New York : Harcourt Brace. pp. 3-10.

Crothers, Charles 1994 *The Columbia Sociological Tradition*, Unpublished data-set.

Durkheim, Emile［1897］1951 *Suicide.* New York : The Free Press.

Etzkowitz, Henry 1993 "Redesigning 'Solomon's House' : The University, and the Internationalization of Science and Business." in E. Crawford/T. Shinn/S. Sōrin（eds.）*Denationalizing Science : the Contexts of International Scientific Practice.* Dordrecht : Kluwer. pp. 263-288.

Glock, Charles Y. 1978 : "Organizational Innovation for Social Science Research" R.K. Merton/ James S. Coleman/Peter Rossi（eds.）*Qualitative and Quantitative Social Research : Paper in Honor of Paul F. Lazarsfeld.* New York : The Free Press. pp. 23-36.

Granovetter, Mark S. 1971 "The Strength of Weak Ties." *American Journal of Sociology* 78 : 1360-1380.

―――― 1974 *Getting a Job : A Study of Contracts and Careers.* Cambridge : Harvard Univ. Press.

Holton, Gerald 1995 "On the Vienna Circle in Exile : An Eyewitness Report" in W. Depauli-Schimanowitch et al.（eds.） *The Foundational Debate*. pp. 269-292.

Hyman, Harold M. 1986 *American Singularity : The 1787 Northwest Ordinance, the 1862 Homestead and Morril Acts.and the 1944 G.I. Bill* Athens. Ga : The Univ. of Georgia Pess. pp. 420-445.

Jahoda, Marie 1969 "The Migration of Psychoanalysis : Its Inpact on American Psychology." in Donald Fleming/Bernard Bailyn（eds.） *The Intellectual Migration : Europe and America,*

1930-1960. Cambridge : Harvard Univ. Press. pp. 420-45.

――― 1979 "PFL : Hedgehog or Fox ?" in R.K. Merton/James S. Coleman/ Peter Rossi (eds.) *Qualitative and Quantitative Social Research : Paper in Honor of Paul F. Lazarsfeld.* New York : The Free Press. pp. 3-9.

Kendall, Parricia L. (ed.) 1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* New York : Columbia Univ. Press.

Kendall, Parricia L./Robert K. Merton 1946 "The Focussed Interview." *American Journal of Sociology* 51 : 541-557.

Landau, David/Paul F. Lazarsfeld 1980 "Adolphe Quetlet." *International Encyclopedia of Social Sciences.* Vol. 13 pp. 247-257.

Lazarsfeld, Paul F. 1931 *Jugend und Beruf : Kritik und Material.* Jena : Gustav Fischer.

――― 1950 "The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis. (ch.10)"

――― 1950 "The Interpretation and Computation of Some Latent Structure. (ch.11)" in Samuel Stouffer et al. (eds.) *Measurement and Prediction vol.4 of Stidies in Social Psychology in World War* II. Princeton Univ. Press.

――― 1959 "Methodological Problems in Empirical Social Research." in *Transactions of the Fourth World Congress of Sociology*. reprinted in Boudon (ed.) 1993. pp. 235-254.

――― 1959 "Problems in Methodology." in R.K. Merton/Leonard Broom//Leonard S. Cottrell (eds.) *Sociology Today : Problems and Prospects.* New York : Basic Books. pp. 218-254.

――― 1961 "Notes on the History of Quantification in Sociology." *Isis* 52 : 277-333. reprinted in Patricia L. Kendall (ed.) 1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* New York : Columbia Univ. Press. pp. 97-167.

――― 1962 "The Sociology of Empirical Social Research." *American Sociological Review* 27 : 757-767.

――― 1962 Introduction to Samuel Stouffer *Social Research to Test Ideas* New York : The Free Press. pp. xv-xxi.

――― 1966 "Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences : Some Historical Observations." in Gordon J. Direnzo (ed.) *Concepts, Theory and Explanation in the Behavioral Sciences.* New York : Random House. pp. 144-202.

――― 1968 "An Episode in the History of Social Research : A Memoir." in *Perspectives in American History.* pp. 270-337. → 1969 "An Episode in the History of Social Research : A Memoir." in Donald Fleming/Bernard Bailyn (eds.) *The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960.* Cambridge : Harvard Univ. Press. pp. 270-337.

――― 1972 "Professional School for Training in Social Research" reprinted in *Qualitative Analysis.* Boston : Allyn & Bacon. pp361-391.

――― 1975 "Working with Merton" in L.A. Coser (ed.) *The Idea of Social Structure : Paper in Honor of Robert K.Merton.* New York : Harcourt Brace. pp. 35-66.

Lazarsfeld, Paul F./ Robert K. Merton 1954 "Friendship as a Social Process : A Substantive and Methodological Analysis." in M. Berger/ T. Abell (eds.) *Freedom and Control in Modern Society*. NY. Van Nostrand pp. 8-66.

Lipset, Seymour M. 1955 "The Department of Sociology." in R. Gordon Hoxie et al. *A History of the Faculty of Political Science. Columbia University*. pp. 284-303.

Merton, Robert K. 1938 *Science, Technology and Society Seventeenth-Century England.* St. Catherine Press.

――― 1945 "Sociological Theory." *American Journal of Sociology* 50 : 462-473.

――― 1979 "Remembering Paul Lazarsfeld" in R.K. Merton/J.S. Coleman/P.H. Rossi (eds) *Qualitative and Quantative Social Research : Papers in Honor of Paul F. Lazarsfeld.* New York : The Free Press. pp. 19-22.

――― 1985 “George Sarton : Episodic Recollections by an Unruly Apprentice.” *Isis* 76 : 470-486.

――― 1987 “Three Fragments From a Sociologist's Notebooks” *Annual Review of Sociology.* 13 : 1-28.

――― 1994 “Durkheim's *Division of Labor in Society* : A Sexagenarian Postscript.” *Sociological Forum* 9 : 27-35.

Merton, Robert K./Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall 1956 *The Focussed Interview : A Manual of Problems and Procedures.* New York : The Free Press.

Merton, Robert K./Paul F. Lazarsfeld (eds.) 1950 *Continiuties in Social Research : Studies in the Scope and Method of "The American Soldier".* New York : The Free Press.

Morrison, David 1988 “The Transference of Experience and the Impact of Idea : Paul Lazarsfeld and Mass Communication Research.” *Communication* 10 : 185-209.

Myrdal, Gunner 1944 *An American Dilemma* vol. 1 New York : Harper & Brothers.

Neurath, Marie/Robert S. Cohen (eds.) 1973 *Empiricism and Sociology : With a Selection of Biographical Sketches.* D. Reidel Publishing Company.

Neurath, Paul 1983 “Paul F. Lazarsfeld and the Institutionalization of Empirical Social Research.” in B. Holzner/K.D. Knorr/H. Strasser (ed.) *Realizing Social Science Knowledge*. pp. 13-26. Wien : Physica-Verlag.

――― 1995 “Otto Neurath : Leben und Werk.” *Enzyklopadie und Utopie.* vol. 30

Neurath, Paul /Elisabeth Neurath (eds.) 1994 *Otto Neurath oder Die Einheit mit Wissenschaft und Gesellschaft.*

Pasanella, Ann K. 1994 *The Mind Traveller : A Guide to Paul F. Lazarsfeld's Communication Research Papers in the Columbia University Library.*

Popper, Karl 1976 *Unended Quest : An Intellectual Autobiography.* La Salle, IL : Open Court Publishing.

Ridolfi, Roberto 1963 [1954] *The Life of Niccolo Machiavelli.* Chicago : Univ. of Chicago Press.

Sarton, George 1935 “Preface to Volume 22 (Quetelet)” *Isis* vol. 23 : 4-24.

Selvin, Hannan C1975 “On Formalizing Theory.” in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 339-354.

Sills, David L 1980 “Paul F. Lazarsfeld” in David L.Sills (ed.) *International Encyclopedia of the Social Sciences* Vol. 18 pp. 411-427.

――― 1987 “Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976 : A Biographical Memoir.” in National Academy of Science, *Biographical Memoirs.* Washington : The National Academy Press. pp. 251-282.

――― 1996 “Stanton, Lazarsfeld, and Merton-Pioneers in Communication Research.” in Everette E. Dennis/Ellen Wartella (eds) *American Communication Research-The Rememberd History.* Mahwah, N.J. : Lawrence Erlbaum Associates. pp. 105-116.

Simon, Herbert 1991 *Models of My Life.* New York : Basic Books.

Simpson, G.E. 1931 “Negro News in the White Newspapaers of Philadelphia.” *Publication of the American Sociological Society*. 25(2) : 157-159.

――― 1936 *The Negro in the Philadelphia* Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press

Stouffer, Samuel A./Paul F. Lazarsfeld 1937 “Research Memorandum on the Family in the Depression.” *Social Science Council Bulletin* 29.

Stouffer, Samuel A. et al. 1949-50. *Studies in Social Psychology in World War* II. 4 vols.

Thackray, Arnold 1984 “CASBS : Notes Toward a History.” *Annual Report* Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences. pp. 59-71.

――― 1987 “A Site for CASBS : East or West ?” *Annual Report* pp. 63-71.

Walzar, Michael 1986 “Introduction” in Berlin *The Hedgehog and the Fox.* New York : Simon & Schuster.

Wright, Charles R. 1975 "Social Structure and Mass Communications Behavior" in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 379-413.

Zeisel, Hans [1933] 1960 "Zur Feschichte der Soziographie." in Marie Jahoda/Paul F. Lazarsfeld/ Zeisel, Hans. *Die Arbeitslosen von Marienthal.* S.101-138. American edition, 1971 *Marienthal : The Sociography of an Unemployed Community* pp. 99-125.

――― 1979 "The Vienna Years" in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 10-15.

【訳者あとがき】

訳出したのは，Jacques Lautman/ Bernard-Pierre Lécuyer（eds.）1998 *Paul Lazarsfeld*（*1901-1976*）. *La sociologie de Vienne à New York*. L'Hartmattan pp. 163-253 所収 Robert K. Merton 著 Working with Lazarsfeld : Notes and Contexts. である。訳出論文が含まれる著書は 1994 年 12 月 15-17 日にパリ・ソルボンヌ大学 GEMAS（社会学的分析方法研究集団）とレイモン・ブードン共催の「ポール・ラザースフェルド・コロキアム」で報告された発表原稿を編んだものである。

本論文の存在を知ったのは，Christian Fleck/Nico Stehr（eds.）2011 *Paul Lazarsfeld : An Empirical Theory of Action* The Bardwell Press. 所収 編者序論 注 40 を通じてである。

マートンがこの報告をしたときは，85 歳である。そのため調べ物について，妻の Harriet Zuckerman, 息子のノーベル経済学賞受賞者 Robert C. Merton，ラザースフェルドの伝記執筆者 David L. Sills, それと Stephen M.Stigler の助けを借りたこと，最も困難な執筆は Dianna Trilling の協力を得たことを論文の最初の脚注で断り書きしている。マートンはこの論文の刊行を眼にして亡くなっている（2003 年 93 歳）。

コロンビア大学社会学科はマートンとラザースフェルドの共同指導によって，1950 年代，60 年代ハーヴァード大学社会関係学科と並んで，後世に名を残す傑出した社会学者を多数輩出した。第二次大戦後から絶頂期にかけての時期のアメリカ社会学会会長の大半をマートン，ラザースフェルドの弟子とパーソンズの弟子が寡占したのであった。

ところで，マートンがこのテーマで書こうとしたのは，長年の懸案を解決したいという意図が働いていたのである。ラザースフェルドは，コーザー編集のマートンに捧げる論文集（1975 年）に，35 年にわたってコラボレートしてコロンビア学派を形成した相棒に「マートンとともに仕事をして」という長文（32 頁）を寄稿している。ラザースフェルドが死去する 1 年前である。それに対して 1979 年に出版されたラザースフェルドの弟子コールマンとピーター・ロッシが編集した，ラザースフェルド追悼論文集（1979 年）には，わずか 4 頁のマートンの寄稿文「ラザースフエルドの思い出」が載っているだけである。訳出論文の中

で，当時マートンは体調を崩して入院していて，調べたり執筆に十分な時間をとれなかったことを，心残りにしていたこと，その引き延ばされた宿題を果たすべく取りかかったことを告白している。

ラザースフェルドのマートン評はマートンが存命の時に執筆していたものだけに，外交辞令的で，マートンをほめ，内面をあまり吐露していない印象が否めない。それに対して，訳出したマートンのラザースフェルド評は，ラザースフェルドが死去して20年経過しているので，ラザースフェルドが耳にすれば怒り出しかねないようなことも率直に語っている。しかし訳者の感想は，思いの外両者は仲が良く，マートンにとってラザースフェルドはいろいろ押しつける迷惑な人ではあったが，自分にないものを持ち，彼と出会わなかったら自分が発揮できなかった才能を引き出してくれた恩人として感謝していることが読み取れる好印象のものである。ハーヴァード大学社会関係学科が，せっかく社会調査のエキスパート，サムエル・スタウファーを採用しながら，コロンビア大学のように理論と調査の統合がうまくいかず，理論のパーソンズが優勢になってしまった経緯を，マートンは自分たちのようにどうしていかなかったのかという点から触れている。

弟子によるラザースフェルド評の箇所で，50年代にラザースフェルドとマートンの両方に師事したジェームズ・コールマンの論文を利用し，弟子の視線からみたラザースフェルド評を盛り込んでいる。院生の眼には，ラザースフェルドは人目もはばからず，自分たちに質問する師，研究費を取ってきて仕事に協力させるブローカー，院生に慕われるよりも，共同執筆と研究費という餌で弟子をつなぎ止める人と受け取られていたこと，ラザースフェルドと喧嘩別れして去っていった弟子が少なくなかったことなど，ラザースフェルドの実像が知れる。

ところで話題が変わるが，最近ラザースフェルド・ルネサンスの観があるが，その舞台回しをしているのは実はレイモン・ブードンである*。彼はシカゴ大学社会学遺産シリーズの一巻に『ラザースフェルド：社会調査とその言語（1993）』を編集し，その出版の翌年にパリ・ソルボンヌ大学で「ラザースフエルド・コロキアム（1994）」を開催している。そのコロキアムの報告が編集されて出版されたのが訳出論文を含む本書である。ブードンがフランス社会学者の中では，フランス的でなくアメリカ的といわれるのは，50年代にコロンビア大学

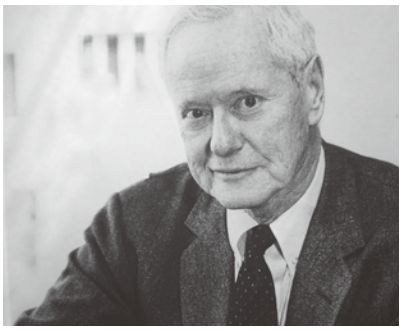
* ブードン編のリーディングスと並んで，前記のフレック，ステール共編のリーディングスもラザースフェルド・ルネッサンスに寄与している。最近のラザースフェルドへの熱い注目を受けて，北田暁大がラザースフェルドを再評価する論文「社会学にとってアメリカ化とは何か：ポール・ラザースフェルドとアメリカ社会学」を発表している（『現代思想』青土社 2014：12月号）。彼の言によれば，ラザースフェルドのアメリカ社会学史における位置づけを知りたいと思ったが，そのような先行研究がないので，自分で調べてまとめたとのことである（対談「社会学はどこから来て，どこへ行くのか？」『書斎の窓』有斐閣 2015：7月号）。

に留学したことが大きい。留学当時コロンビアにいたコールマンとも親しくなった。ブードンは2006年にチェルカウイとハミルトンが編集したブードンに捧げる論文集の寄稿「自分はどうして社会学者になったか」のなかで，『教育機会の不平等』の著者としてしか自分が評価されないことに不満を述べている。20世紀後半の仏社会学の代表者にピエール・ブルデューの名は上がるのに自分はどうして上がらないのか，不満を漏らしている。そういえば，その時期の代表的社会学者に，マートンの名は上がるのに，ラザースフエルドの名もあがらない。そのような状況に一矢を報いたいという気持ちがラザースフェルド・ルネサンスにブードンを駆り立てたのであろうか。

それにしても，パーソンズは同じハーヴァードの社会関係学科の同僚，ソローキン，ホーマンズ，スタウファーと犬猿の仲であった。いずれも癖のある人物だけにパーソンズひとりを責められない。マートンは極貧の東欧移民の子の出自ながら，たぐいまれな彼の才能を見抜く人びととの数々の幸運な出会いに恵まれ，行く先々でかわいがられる人付き合いのうまさを身につけていた。変わり者のラザースフェルドとも，マートンだったからこそうまくやれたという感想を訳者は抱いている。

なお，原文は注が番号を付して100まであるが，訳文では，出典表示は本文中に移したため，原文と訳文の番号が一致しないこと，文献一覧は，注に記載されているものを基に訳者が作成したもので，原文には載っていないこと，原文脚注に示された文献表示に編者名，書名，出版社，掲載頁の記載が不備なものがあったが，注では不備をそのままにし，文献一覧で補足しておいたことを断っておく。応用社会調査研究所歴代所長と在任期間，コロンビア大学社会学科1941-1970の大学院担当教員の名前と在任期間，ラザースフェルドからマートン宛の直筆メモと，献本添え書きの複写も省略した。

情報満載なのに，意外と存在が知られていないこの論文が，論集に掲載を機に日本の社会学者の注目を浴びることは必至であると確信していることを述べて擱筆することとしたい。



ロバート・マートン

ポール・ラザースフェルド